

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二五年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十四卷第八号（通巻七六二号）

8月号・2025年

第64回 冬雷大会のご案内

本年の冬雷大会は、次のようになります。

日時 十月十二日(第二日曜日)

午前十時より四時半までとなります。

懇親会は五時より七時半までです。

* 大会参加費用詳細は現在検討中です。

会場 ホテルルートイン東京・東陽町

(地下鉄「東陽町」駅より徒歩5分)

大会用詠草(未発表作品一首)を八月三日必着。

* 出詠費一〇〇〇円を添えて事務局宛。

* 本誌綴じ込みの出詠用紙をご利用下さい。

諸費用

参加費(会場費補充)として

一〇〇〇円

昼食費(ホテル調達御弁当)

三〇〇〇円

懇親会(希望者のみ)

九〇〇〇円

* 当日受付にて御支払下さい。

* 年々参加者の数が減っております。年齢を重ねると、なかなか思いうように外出もできなくなります。逆に言えば、自由に動けるうちということもあります。ご都合の良い方は、ぜひご参加下さい。

《冬雷短歌会》

8月号 目次

冬雷集	1
作品一	20
八月集	38
残響集	42
作品二	48
作品三	56
六月号冬雷集評	山本三男 14
六月集 / 残響集評	鈴木やよい 15
大友柳太朗と美空ひばり③	大山敏夫 16
六月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 34
六月号作品二評	井上蒼子・江波戸愛子 44
六月号作品三評	桜井美保子・橘 美千代 46
六月号十首選(冬雷集・六月集 / 残響集)	56
六月号十首選(作品一・作品二・作品三)	58
大崎瀬都歌集『みづぐるま』紹介	桜井美保子 61

冬雷集

骨を回せ（山本ゆう子氏に学ぶ）

大山敏夫 埼玉

腰椎五個胸椎十二個頸椎七個頸椎一番はくるくる回る

頸椎七番は首の後ろに突き出たる骨でその上がクビになります

骨盤はまはりませんよ骨盤はせいぜい五パーセントほど回るだけ

腰の切れ腰の回転はみぎひだりの股関節に鋭く体重乗せて

尻の割れ目あたりに手のくぼほどにある仙骨といふ大事なところ

仙骨は躰の中心きつちりと仙骨より始動して回転させよ

肩甲骨は浮いてゐるだけ腕は鎖骨の内側から伸ばせしつかり回せ

喜寿を過ぎ初に聞くこと斯く多しゴルフのスイングと骨の関係

ゴルフにて発症せし大腿骨頭壊死 美空ひばりのその後の三年

赤間洋子 東京

佐世保に住む中学時代の友人と二十余年ぶりに国分寺にて会ふ

墓参り兼ねて上京したる友を我が家に招き食事を共にす

夫と我九州旅行の一日を彼女の家に招かれしことあり

互に夫は他界し独居なれどその地にありて元気に暮らす

美しき文字を書く友俳句をつくり合同句集を贈りてくれぬ

優しき友は耳遠くなり補聴器に加へ集音器も使ふ
 昼食を共にし思ひ出語り合ひ名残惜しげに帰りてゆきぬ
 懐かしき友帰りてもしばらくは心満たされ笑みがこぼれる

兼 目 久 栃木

北鮮は韓国を国家と見なさずに声明を出し敵国とみなす
 国内の製造業のためといふトランプ大統領関税の値上げ
 日光市清滝に住みし教師時代田んぼなく授業に苦勞す
 日光駅ゆ馬返駅までレール敷かれ電車が通りしを思ひ出したり
 コンビニ店は週に一回休む日を三十年前のしきたり思ふ
 核実験のキノコ型の爆発は輝き燃ゆる太陽に似る

新聞に転・退職員の発表あり孫らの就職の時代に移りし
 あまりにも寒く冷たきに目をさます常とは違ひ寝つかれずをり

山 崎 英 子 東京

み社をこんもり覆ふみどりのなかに今宵の塙か鳩が入りゆく
 公園を一人歩めば著莪の花うす紫に古里思ふ

空地埋め直に育ちたる露あまた母思ひつつきやら露にしたり
 年々に母はきやら露作り呉れ送られ来るを待ちし思ひ出
 細き雨降り出したる夕暮に今宵の塙か鳩が入りゆく

森 藤 ふ み 東京

クレマチスの花に見とれてゐる我に話しかける人のあり

歩き疲れくわりんの木下のベンチに足を休ます無口になりて
 植物園並んで歩けば私七十二歳とつぶやく我より十歳若い
 マスクして目深に帽子かぶる二人次に会へても解らぬだらう
 四つ角の海紅豆の樹今年の花のやうやく咲き出す
 花咲かぬナンチャモンチャの葉の茂り信号待つ間の良き日除けなり
 マンションの給水ポンプの更新に明日は五時間断水となる
 弁当用サラダ作りてゐる娘われの分を取り分けくれる

近江富士 櫻 井 一 江 東京

社会人一年経たる孫訪ね滋賀県へ向ふ娘とともに
 近江富士全景望める独身寮に孫の用意のイチゴ大福
 久々に会ふ孫頼もし青年となりて渡さる名刺の重み
 静かなる物言ひにして何事も心得ゐたる孫に付き行く
 雨空に躊躇するなか「行かうよ」と孫の一声に安土城跡へ
 城跡の案内板先に芝刈りのロボットが動く規則正しく
 アヤメ咲く八幡堀を木船にて近江八幡の歴史に触れをり

有 泉 泰 子 山梨

隣接の空地にいよよ家建つと草刈り地ならし話し声する
 草刈を終へたる隣地の静まりぬ明日には工事の始まるといふ
 しばらくを空地のままにすごしたる隣に大きな工事車三台
 我が古屋倒れんばかりの音立てて工事始まる隣の空地に

吾が子より家継ぐ者のいづくるや静かにそつと夫とすごさむ
都会での生活にいそがしき男の子二人家のことなど頭になからむ
昼食は俺が買つて帰るとぞ脚の調子の良いらし今日は

富田 眞紀恵 富山

ひとつ年増したといふは心にも豊かさひとつ増したとせむか
姉妹三人にかこまれるたる遠き昔思ひ出させて夕暮れがくる
明日はまた元気で過ごせる私でありますやうにおやすみなさい
幸せは自分がつくり出すものと教へてくれし人思ひをり
もし吾がピアノひけたら青空にありがたうの歌をおくりたい

青木 初子 神奈川

足場組む金属音の響き止む十時十二時吾も一息
クレーンに外壁運ばれ一階の見る見る出来て景色の変はる
思ひのほか大きな二階家庭前に建ち上がりゆく慣れねばならぬ
朝の陽を遮る家のこんなにも近くに見るは初めてのこと
後遺症あらず脳動脈瘤の手術終ふ入院わづか十日間なり
七時間の手術時間に筋肉の衰へ足に力入らず
十日かかり足の力の戻りゐて自転車に乗る自信湧きたり
ウィッグの世話にならざり手術痕日日痛まず消ゆるに早し
看護する夫の行為に難儀せり日々の生活理解に苦しむ

吉田 綾子☆ 茨城

突然に昔のことを語り出し夫の素顔が甦るなり
食べること大好きなる夫ゆえに三度の食事に気を配るなり
何事も「痛い、痛い」と騒ぐ夫接する手立て大方慣れくる
免許証を返納したるを根に持ちて日々悔しがる病みいる夫は
早苗饗さなぶりを急いで済ませ来たという庭師夫婦の日焼けの笑顔
待ちいたる庭の手入れに腰痛を忘れて庭師の接待に動く
大小の伸びたる草々取り除き掃き清めたる庭の広さは

中村 晴美 茨城

古古米と古古古米の放出さる保冷倉庫の信頼度いかに
さらにまた古古古古米を放出か家畜の餌か人の食ひ物が
梅雨入りか局所的な大雨の修繕したての瓦屋根打つ
初に見るハツユキカズラの白き花むせる匂ひジャスミンに似て
手を滑りスマホ勝手に床に落つ保護フィルムに走る縦傷
五十肩再発痛し姑に貰ひし湿布効き目良好
ひさびさに安きガソリン満タンに海辺の店へ遠出の晴れ間

橋本文子 鳥取

紫のあぢさゐ今年もよく育ち百以上の玉花六月の庭に
一株のあぢさゐの元氣話したし花好きなりし母に見てほし
小花の穂立てて伸び咲く泡盛草冬には消えて六月穂花
胡瓜伸び黄色の花が小さく咲き期待してをり今年の出来栄え

トマトの花小さき黄色に咲き始め専用土の袋に育つ
専用の袋の土に植ゑるとの教へはトマト苗売り場より

山口 嵩 福島

吾妻峰の中腹にかかる薄き虹雨去る後の風は和める
白みたる空に薄ら透ける月ふと浮かび来る母のぬくもり
いづこより湧きたる雲かいつときの姿におぼゆ詩情空間
浮かび来て姿かへつつ移る雲くれなゐ増して浮かぶ母の背
布製のグラブに嬉しさ隠されず駆けまはりける小五の聖夜
真夜中に覚めてカーテン開け見れば湿れる庭に月影ただよふ

リコーダー 酒向陸 江☆東京

近隣のゆるく仲良く集う会月一回を続けて十年

リコーダーを習いたいとの声ありて講師依頼し楽器を調達
リコーダーを早く吹きたし心は踊るなれど指導は呼吸法から
少々の水の入ったペットボトルにストロー入れてぶくぶく練習
リコーダーの音色やさしく吹く為にぶくぶく練習は必須という
長老は九十四歳山男肺活量はグループで一番

「ぶんぶんぶん」「カッコー」「蝶々」童謡に戯れ一人リコーダーを吹く

天野 克彦 大阪

同じ巢に生れたる雀かこの群れは来るも還るも離れずにある
生と死のあはひに遊ぶことのあり泉下の友らを叩き起こして

夢に来て関口正道なにか言ふ口は動けどこゑは聞こえず

浮雲は夢見るやうに流れゆく危ふく涙が落ちんとしたり
たまきはる命はかなし午前五時かすみのかかる山の静けさ
公園にあそぶ子供らかはゆしと齡のふけてしばしばおもふ
入梅のさきがけなるやこの夕べ雨に混じりて雷の音きこゆ
吹く風に庭木の青葉さいなまれ哀れとみてをりけなげな様を

在宅介護 高松 美智子☆ 栃木

民間の緊急車輛に送られて九十八歳三月^{みつき}ぶりの家

退院日に集える七人専門職在宅介護の今後を支う

緊急時駆けつけくれる看護師と訪問医師に支えられいる安心

床ずれ予防の最新ベッドに車椅子専門職の連携たのもし

支えくれる感謝を言えば「大丈夫か」と心向けくるる言葉をもらう

昼に来るヘルパーさんに委ねんと粥と煮物をミキサーにかける

離乳食介護食にと活躍す子に貰いたるハンドミキサー

人の生を見届けきたる経験は在宅介護の覚悟を後押す

「みちこさーん」身体をくの字に折り曲げて二歳の大声店内に響く

高橋 説子 栃木

理科棟のベージュの壁が復活す改修済みたる母校うるはし
ためらひの無き動きにて植込みに腹這ふ蜥蜴ただに素早く
小さめの蜥蜴は小枝に潜みゐて拾ひ上げたるわれと目が合ふ

親方の剪定受けし百日紅の丸き伐り口にはや若葉つく
ひもすがら鳥遊びたる庭の暮れカルミアの花ぼんやり白し
雨あとの小砂利の中の草でさへみどり色濃く丈伸ばしゆく
ハツ場^{ちゃんば}ダムの何とも言へぬ瑠璃色の水に溶けてる長き鬨争

大塚 亮子 東京

花の名を教へくれたる友思ひ茶の湯の床に花イカダ挿す
茶の稽古ある日は友の育てゐる草花貰ふ早起きをして
自転車に行くわれ待ちて水揚げをしたる草花有難かりき
隣の友越し行きてより幾年か思ひゐる午後訃報のはがき
梅の木の勢ひ茂る葉の陰に小き青き実いくつが育つ
青梅の傍ら通り過ぐる度微かな香り嬉しく聞きぬ
父の日の祝ひと娘の持ちくるるケーキに夫の顔ほころびぬ

潔水 嶋田正之 埼玉

生涯のテーマと決めたる清き水身近な場所に観る事出来ず
求めたる百号Fのキャンバスにインディゴをもて厚き下塗り
潔水を求めて来たる故郷の嵐山溪谷のポイントに坐す
溪谷に射す陽光の柔らかく独りの時間を静かに見つむ
吾の亡き後に困るや絵の処分されど絵筆を止める事無く
夏休みほぼ毎日を川に居て泳ぎ潜りて身体真つ黒
小学校一年生の夏休み天皇の声庭に立ち聴く

石くれの河原を裸足に走りたる子供の頃の皮膚は今無く
雷鳴の聞え来たれば川遊び急ぎ切り上げ家に戻りき

江波戸 愛子☆ 埼玉

孫つくりくれたる古き風ぐるまときに勢い増してまわりぬ
銀色と色鮮やかな手作りの風ぐるまを娘もちくる
作りたて二本と古き一本の風ぐるままわる同じ速さに
金柑の葉のみずみずしこの頃は寄り来る蝶の姿の見えず
狭き庭なれど夫の楽しみと思ひ見ている四季の花ばな
アイパッド見ているあなたの背後にてアイパッドに記す今月の歌
その父に似てきた夫と思ひみる孫に小遣い渡す姿を
嫁ぎ来て親しく名前を呼びあえる同年生まれのいもうと頼もし

加治川堤 橘 美千代 新潟

三月は冬枯れの堤に河川敷いまはいちめん緑の六月
堤より河川敷おほひ丈高く繁れる草の視界さへぎる
ひとたびは遠ざかり木々に隠れたる川あらはれて広々と流る
堤の道をたどりゆきつく大き堰ここより田へと水路伸びゆく
さみどりの苗育ちある田にそそぐ水おとさやけし六月の午後
用水をひきてめぐらす加治川の水の育むさみどりの苗
水張り田に日々育ちある稲苗に希望わきくる今年こそはと
堤よりいつも見えぬ朽ちかけの納屋にサトイモ畑いま無し

真夜中に猫とわれとは庭に立ち北極光の出現を待つ
太陽の風の今宵は強く吹く光の暖簾は山の向こうか
夜に響く声はおそらく寝言なり腹を空かせたカラスの子供の
わが海馬やさしき夢を作りおり五月に逝きたる友を連れ来て
マドリーン号を冷たく笑うひとびとは撃たるる恐れのないところに

稲田 正康 東京

消石灰混ざる歌あり酸性土壌といふに混ぜにき昭和二十一年
古きアパート撤去されたる跡の地の意外に広し何建つべしや
引越し荷物来たる隣室住む人の来たらず気にすることではないが
すべり台駆けのぼりをる子らの靴そろへて下に並べたるは誰
雨をいひ降らぬ日づく定まらぬ気温にもの入れ替へもせず
建物は日陰に入りて煙突の抜き出づるのみ光に白し
従妹の子ら来たるに話す祖父のこといところといつも遊びにしこと
戦後の日び強きは母系いところの祖父に集ひき楽しくありき

田端 五百子 岩手

ペランダに来たる雀に餌を撒き校長先生バイクで出発
林野火災に塹変へたるか馴染み啼くカラスの声の夕べも聞かず
灯明を点せば夫の好みみし切子のグラス放射と輝く
医療にも世話になりたる風もなく天寿か老いの独り逝きたり

春日さす軒端に居座り還りこぬ主を待つか半眼の猫は
風花す空を見上げて笑まひ合ふ見知らぬ同士は相席となる
譲られて座るバス席女生徒の若き温みの残る窓際

中村 哲也 宮城

駅降りて早々コインロッカーの前で防寒着へと着替へる
駅なかの立ち食ひ寿司屋に寿司十貫午後の一時に空腹満たす
廃線の手宮線跡散策路傘差す女性の独り佇む
二階まで貫く四本の円柱を傘差し只々只々眺む（旧安田銀行小樽支店）
重厚な扉向うの地下金庫独りゐるのは心細きに（旧三井銀行小樽支店）
描かれる羽の細密際立てる谷文晁の孔雀図を観る（似鳥美術館）
雨天にて運河クルーズ欠航の表示のあれば小樽を去りぬ

山本 三男 群馬

伊勢崎から来たのですかとナース訊くスバルの名の付くこの病院で
病室に点滴受けつつパズル解く消しゴム忘れず用意して来て
太田市 of 病院に居てひと事のトランプ関税のニュースを見たり
自動車の品質管理の考えをこの病院の随所へ感ず
どのような手術をするのか問われたり手術を前に身構えいるに
この部屋に手術監視の人も居て録画開始の声を聞きたり
病院の屋上にある庭園を見うとまなくわが退院す
わが庭にナデシコの花が盛りなり手術を終えて帰り来たれば

病床に眠れぬ夜を過ごしたる昨夜のことは夢のようなり

姉 川 素枝子 福岡

庭土に移して年どし幹ふとり枝垂梅さく老い忘れよと
くだされし君の御霊の宿りぬむ八重の花むら今年も会へり
灯籠を覆ひて陰をおとしめるうすくれなゐを人ほめてゆく
紅梅の散りてやまざるみ神社の將軍梅さくこの年はやく
遅ぎきの將軍梅のはやもさき紅梅小雨の伴なひてゆく
梅の花ちらぬ中より辛夷さき季あやまてるは吾にあらずや
冬の花啓翁桜ちらぬまに緋寒吉野ともにさきみつ
梅の花こころゆくまま散り尽きて木下に白し春なきごとく
園庭の桜の下の新能「井筒と羽衣」みしと子のいふ

井 上 菅 子 山形

ハウス内に風は生まれず一生を風を知らずに育つ椰子の木
翡翠葛は翡翠の花を見てくれと棚より垂れて人見上げさす
土の配合平仮名書きにメモをしてくれたる多肉売場のをばさん
縋る木をもたざる藤は地面這ひ花房も這ひ咲きて春終ふ
降りて止み止みてまた降るけぢめなき空の模様よ明日は晴れよ
もやしのひげ取るか取らぬか議論する他局は戦禍の国を映せり
潮騒の聞こゆる宿に蝦蛄を剥き匂ひ付く指持て余したりき
民宿の女主の越後訛温かかりき遙かなる日の

ボタン一つ外れて白きうなじ見ゆしばらく眺め掛けてやりたり

井 上 榎 子 新潟

料亭の格式誇るあるじなれど時世を嘆き居酒屋に換ふ

如何ならん言葉を網羅し論せども身寄りなき老い墓を建て替ふ

梅雨入りの増しゆく雨量に眠られず舟出す程のかつての被害に

うすき枝の古木の間の夕茜梅雨近きかと子らと言ひ合ふ

「思し召しより米の飯」諺辞典に見付くなりおほかた願ふこのご時世に

探鳥会の人ら登ればわが山の揉み合ふごとき鳥の騒し

戦ひのごとき暑さの俄雨ことさら鉢植ゑ運びて濡らす

長病みの夫を氣遣ふ日々なれば氣分の波に晴れる日のなし

様々の懸念持ちあるわれなれど理路整然と寺院総会仕切る息子は

■ 転載歌 (うた新聞 六月号)

梅雨季

井 上 榎 子

連なりて輝く藤の花見惚るわれに梅雨季の蛸はまつはる
繰り返す梅雨寒にてかこの時期の体調風邪とのけぢめなきこと
浴室の軒に巣作りしたる栗鼠今朝騒がしく若子の声らし
雨あとの暑き日差しの裏の池に時をり野太く牛蛙鳴く
降り続く雨あがらむと山の上に色鮮やかな太き虹立つ

● 八月川越歌会は休みです。

四月より始まり三回目となった六月は、
十八人室を使い広い環境の中でした。JR・
東上線「川越」駅より屋根の付いた歩道橋を
歩いて五〇〇メートルほどにある「ウエスタ
川越」が会場です。恵まれた環境乍ら六月は
参加五名と減少し、寂しくなりました。お近
くの方の応援参加を期待します。九月は27日
(土)13時より第三会議室開催です。(係)

六月号冬雷集評

山本 三男

湯上がりに爪切りをれば母おもふ爪だけ
けはよく伸びると言ひし 森藤ふみ
若い頃に何気なく聞いたお母さんの言葉が、歳月を重ねてその思いがよく分かるようになったのでしょうか。しみじみとした気持ちが伝わって来ます。

今年こそ閉ぢたるままの父母のノート
取り出し妹に送らむ 有泉泰子

秘密めいた表現に心を惹かれる歌です。今年こそとあるのは、何年も気がかりになっていたノートなのでしょう。閉じたままにしているのは何故でしょうか。事情は推定するしかありませんが、作者の決意が分かるような気がします。

買ふ花の数を減らせど花咲かぬ球根植
ゑれば鉢は増えゆく 青木初子

花の好きな人の思いが伝わってきます。なるべく鉢の数を増やさないうように思っている、花の咲かなかった球根も捨てられず、挙句の果てに鉢が増えてし

まうのも好きならばこそでしょう。

天ぶらにと安易に植ゑしリョウブなり
カイガラムシは想定外なり 中村晴美
世の中、安易に考えているようなには、なかなかうまくいかないもの、そんな思いがよく出ています。筆者もカイガラムシには悩まされています。

重き物持つ事叶わぬ我が身なり日頃の
嫁御の氣遣い嬉し 吉田綾子☆
お嫁さんに感謝する作者の素直な気持ちが自然に歌われています。嫁御という言葉も自然に使われていて、良好な関係が築かれていることが分かります。

断定の言葉をやすやす口にする顔を眺
めつ反論はせず 高松美智子☆
作者の確かな考え方の表現された作品です。物事の一面だけしか示さず断定する言葉を一方的に言う人を、冷静な眼で見えています。

突き刺さる勢いを持つ塔の群見下ろし
ている無言に空は ブレイクあずさ☆
自然に存在する樹木などはそれぞれ少しづつ形が異なりますが、人工物の塔は

六月集／残響集評

鈴木やよい

五日ぶりの晴天なればおのづから雑巾
握り窓ガラスを拭く 石渡静夫

雨が続いた後によりやく晴天になったようだ。久し振りの太陽が嬉しくて窓ガラスを拭く作者。拭きあがった窓からは明るい光が差し込んでいることだろう。こちらもさわやかな気分になる。

南より春の女神が来たるらし足置く処
雪間となりて 小林貞子

春が近づき、ところどころ雪が解けて地肌が現れている。その喜びを春の女神が来たと表現している。女神が足を置いた所が雪間になっているという発想が楽しい。ファンタジーを感じる歌だ。

迫る老いをくよくよ憂いて生くるまじ
とハワイ旅行のツアーに参加す

川上美智子☆

老いが迫っても憂いてなんかいられない！という作者の強い気持ちが伝わってくる。その通りだと思う。ハワイ旅行を

楽しんだことだろう。

砂浜は足指刺激に良しと知り転倒防止
を期して歩めり 山本述子

砂浜を素足で歩くのは足裏の筋肉強化に効果があると聞いたことがある。その上、砂浜を歩くのは通常より消費カロリーが高いそう。よい運動になると思う。痛む膝ようやく癒えて総会に出てひと日は短く終る 児玉孝子☆

痛みのある膝もようやく治ってきたようだ。さあ総会にも出席できると出かけたのであろう。でも一日は短く終ってしまった。せつかく治ったのにこれだけで終わってしまったという小さな落胆がみえる。

白鳥の北帰行間近か川辺より群れ集ふ
音いよよ激しも 佐藤幸子

白鳥は冬になるとシベリアから越冬のために飛来し、春先にまた戻っていく。これからシベリアに帰る北帰行を控え、白鳥たちが集まり始めている。次第に激しくなる鳥たちの声に作者の気持ちも高まっているのだろう。無事に目的地に帰

皆同じ形をしています。発想の素晴らしさに感心しました。

懸命にのぼり坂こぐ自転車のもれでも
吾を避けてゆきたり 稲田正康

作者は坂道の上側に居て、懸命に自転車をこいでの上から来る人の姿を、もしかすると自分にもぶつかるとはならないかと、心配しながら見ていたのかも知れません。避けて行った自転車に安堵する思いを感じられます。

さくさくと和梨のやうな朝が欲し腕の
痛みは朝四時にくる 井上菅子
上の句では、みずみずしい和梨の食感がイメージとして歌われています。そのイメージは、現実の痛みを紛らわすためのものではいか。

張り替ふと障子や襖戸はづしをり外に
居るごと新緑眩し 井上楨子
最近では洋風の住宅が増え、障子や襖戸の張り替えすることは少なくなりました。この歌では、障子や襖戸を外し明るくなった部屋から見える新緑の様子を捉えており、解放感が見事です。

り着くことを祈る。

つつんとマルチの下より合図するじ
やが薯の芽の強きいのちは 梶尾栄子
じゃが薯の芽が伸び始め、マルチの下からつつんしている。小さくてか弱い芽がマルチの覆いを物とせせずに伸びようとしている。発芽の時はいつも命の強さに感動する。

墓守も身内のつながり疎になりて無縁
仏も現実味を帯ぶ 山崎 猛☆

最近では社会の状況も家族のあり方も大きく変わってきている。そのため、お墓を継承していくのが難しくなり、墓じまいをしたり無縁仏になったりするケースが増えているという。このような現状に作者もいろいろ思うところがあるようだ。

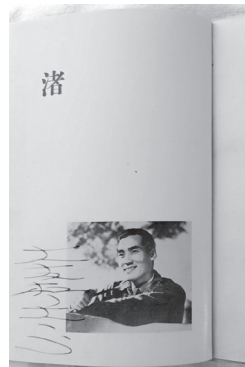
フルタイム勤務となりて生活を見直し
優先事項書きだす 片桐美穂子☆

フルタイム勤務となると時間的にも体力的にも大変だと思う。それでも生活を見直して、優先事項を書き出している作者。新しい生活を維持するため積極的に取り組んでいる姿勢は立派だと思う。

大友柳太朗と美空ひばり③

—その短歌と情—

大山敏夫



歌集『渚』扉の写真とサイン

幸運にも歌集『渚』を入手した。その結果、幾つかの間違いいも見つかった。先月号までに取り上げた作品については、この場を借りて、まずは訂正したい。わたしが基本としたのは『大友柳太朗快伝』に収められた大友作品二十二首と、同書の中の執筆者が記憶に沿って紹介する作品幾つか、また、インターネットのブログ等で、引用紹介された作品の幾つかを、そのままに資料としたもので、そういう中で誤植誤記があったとしたらお手上げとなる。それら全作品を歌集『渚』と突き合わせてみると、心配した通りになった。

本稿の①では、

○よき人と住まばや秋の嵐山芒すすもの中の小さき平家いへに

は「ちひさき平家ひらや」が正しく助詞の「に」は無い。本稿②では、

○たち出づる朝あしたを家の父と酌しやくむ酒のにがさよ胸に沁み入る

傷心の吾れに冷たきこの雨よ花の夜更けの清水の寺
清水や遠く別れし人の名を空しく描くらくやきの店
逝く秋の落葉をもやす煙かなしもの思ひする子となりて
より

戀も金もはたまづしさもうち忘れたゞ狂ほしく仕事して
をり

誰か世に火よりもあつき誠もて吾れを抱かん人はあらじか

明らかにしないが恋愛の情を源とする作品は多いのかと思う。そして明らかになった作品にも、すっかり虜となった表現もあるが、かなり抑えて客観的に自分の思い、動作を描写する気持の入ったものもある。この女性は新国劇時代のファンで、結核を患って軽井沢で療養していたらしい。

一度ならずの見舞いとある。不治の病とされた結核には、きれいな空気の中で、安静にし、栄養をとって体力をつけるということが第一とされていた。軽井沢の六月七月とあるので、複数度なのは分かる。歌の下句にはその雰囲気をつ捉えた美しさ、人を愛する純な情も籠る。

巡業では毎年同じところに来ることが多いのだろう。軽井沢は、巡業地より近かったのかもしれない。堀辰雄の『風立ちぬ』とほぼ同じ時代、ただしあの小説の舞台は富士見町のサナトリウムである。

恋は結実しなかったが、確実に人間大友柳太朗を大きくさ

の初句が「出い發はつる」四句は「酒のぬるさよ」であった。また、○酔ふにつれて人と同じく歌唄ふ明るきさがを星と思へどの結句の「星」は平仮名で「ほし」が正しい。この星については、小誌の校正時に、担当の橘美千代氏から、「ほし」の間違ひではないかとの指摘を受けていた。やはり歌人には何となく変だと思うが、『大友柳太朗快伝』を編んだ人たちがやネットのブログの人たちには馴染めない短歌のこと、やむを得ないところかもしれない。関連するわたしの文については、後日出版する機会があればその時に訂正したい。

高橋輝次氏の取り上げた七首の内には女性と別れる歌もある。これは本稿の①で記した軽井沢に見舞った人だろう。

去年こぞの夏胸病む人をいくたびかこの峠やま越えて訪ね来りし
という作品だった。ガチガチ生真面目な人がいったん恋愛におちたらどうなるか、ちょっと怖いに関わる作品にどんなものがあるのか、歌集『渚』を探ってみた。そういう歌は全体に散らばる。

軽井沢の六七月よ天地あめつちのものみな青しものみな澄めり
何處かに捨てんとしたるこの思ひ空しくもちて旅よりかへる

夕月のほのかに匂ふ大秦の花野の原に君と別れし

せた。恋も世俗のことも忘れへたゞ狂ほしく仕事してをり
という処理法に昇華させた。そして、

思ふ事はた希ふ事戀ふることたゞ一すぢに狂ほしくよむ

と短歌に没頭しつつ鎮火する。理想の女性像が、

近松の世話浄瑠璃の中に住む女ならばと心にきめぬ

とあるのはどうなのか。近松ものでは心中が多い。

高橋輝次氏は「ははそば」から、

○うたたねの母の面のおもやつれ

ひそかに泣きて顔をえむけず

○母と二人手足のばして新らしき

青蚊帳かの香をしばし愛でをり

○たよるもの天にも地にもたゞ一人

マリアの如くなつかしき母

をあげ、「どの歌にも母に慈悲深く育てられたことへの感謝、年老いた母への哀れみや労りの心が素直に感じられる。」と述べている。その通りだが、かなり甘えん坊か。さらに、

○楽し楽し道行く人が誰一人われを
知らざり歌うたひつつ行く

○塩壺の夜中の湯ぶねに獨りあて
うつら／＼と物思ひをり

○辨當を売る見覚えの人もあて

降り立つ駅のなつかしき哉

とあげてゆく。三首目の結句「なつかしき哉」は直前の作にもあったし、細部の推敲未熟は歌集『渚』には目立つ。このあたりの作品は皆軽井沢でのもの。塩壺温泉は星野リゾートの創設者が星野温泉と共に開設した所で、一九三四年開業という歴史のある湯だった。大友が楽しんだのはちょうど開業して間のない頃か。

京都での映画撮影の明け暮れが歌われる「京洛」からは、都での粋な遊びや寛ぎの見える作品が選ばれている。

○逝く春や廓の塀の白壁に

娼妓のかける楽書の跡

○常磐津の稽古がへりの舞姫の

素足白しも秋更けぬらし

前でも述べたが、大友柳太朗は独学我流の歌人なので、永年の経験を積んだ者から見ると隙だらけの歌である。高橋氏のあげている作品の中から、これはちょっと表現的に課題ありと感じた幾つかについて意見を添えておきたい。

○逝く春の清水寺のきざしに

ひょう／＼として鳩笛を吹く

○きりきりと胸に沁み入る寂しさは

希ふ仕事の与へられぬ故

○セツト裏に若き女優が泣きてをり

「叫ぶ野武士」のあがる夕ぐれ

○はじめよりこの性質もてる吾ならず

物を言はぬはさびしき故ぞ

○よそ目にはこの侘しさを知られじと

派手にふるまふこの身いとほし

○二十八たゝわれ独り生きて行く

いとにがきかな人間の味

○かにかくに歌よむ吾れに許されし

この法悦を許し給へや

高橋氏は少し引用が多すぎの感だが「若き日の大友氏の人間の全体像を伝えようとすると」こうなると述べて、「独り、さびしき、侘しきといったストレートで正直な語が多く使われている」と指摘している。そして「人づきあいは苦手で独りでいることを好む性格の人であった」とも言う。

同意見である。更に少し細かく加えると、一首目の「ひょう／＼」は「飄々」と漢字の方が良い（どこでの間違いかは不明だが、飄々なら旧仮名で「へうへう」が正しい）。二首目は、上句下句の関係が直結すぎる。三首目。この映画では、共演女優も多いので、クランクアップでのこの行為が誰かは不明。結句に情緒的に添えた「夕ぐれ」は不要、素直に△撮影がある△で良い。この映画は、かなり力の入れられた大作のように、関わった女優が思わず涙するのも理由がある。四首目は、下句を△話すことなしけふこの頃は△とても状態で表せ

ば良くなる。五首目は、二首目と同じく上と下が直結しすぎ。

「派手に」が不要なので△けふもふるまふが身いとほし△程度に抑えれば良いかと思う。六首目は下句の意味がよく分からない。「人間の味」とは何か。最後の一首は、何を許されて何を許せよと言うのかをもっと具体的に表さねば読者に伝わらない。少し控えめに△この法悦に身をゆだねをり△くらしい状態で言っておけば良いかと考える。などなどあるが、完成した歌集、著者が彼岸の住人を思えば全く余計な愚言とも言えるだろう。

さてこれらの作品を見てきて思うのは、心の中をうたい嘆くものが何と多いことか。「性格は暗く寡黙」という小学校時代での記録からの脱却は容易では無い。

滑舌の悪さのようなマイナス面も多く、新国劇では端役脇役ばかりで悩み腐ることもあった。そんな下積みを経て、映画界へ転身。主役デビューを飾った時、新興キネマはその売り出しに知恵を絞った。そこで女性観客に目を付け、△大友柳太郎後援の「大友婦人会・会員募集」△に打って出る。その募集チラシの図まであげて、この顛末を千頭泰氏が「大友柳太郎覚書」（『幻燈我楽多館』93年新年号 平成五年刊）の中で記している。その色男ぶりが目玉だったというのが大友柳太郎の映画転出の裏話だったのだ。

歌集名「渚」の由来はその「序」にある。「なぎさ」は流

れてきた土砂が集まって川や湖の中にできた小島という意味だが、「渚」という漢字は、「台上にしばを集め積んで火をたく」象形文字だという。自序でも、△朝の、はた夕の渚に打ち寄せられしものろの塵芥を あつめてもちかへり いぶせき吾が賤け家の庭にて焚けば△とあり、これはまさに文字の解釈。△あはれにも又いとほしきは その、吾が身に沁みる 木々の移り香にこそ△と最後にようやく、自分の短歌はこのような自然の移り変わりの中で、そこはかとなく薫り、折々に情に沁みて遺った愛おしいものだと思える。

だが、なぜ「渚」となるのかは分からない。「渚」を大事な歌集名と定めたのはなぜか。わたしはこれには波郷の存在を感じてしまう。「石田波郷の俳句の陰に柳太朗あり」と同様に、大友歌集『渚』の陰に波郷あり、なのであろう。

中学卒業後の波郷も進学はせず実家（松山市内）に残り本格的に句作に没頭することになる。そしてめきめき頭角を表してゆく。そういう波郷とは、新国劇時代は特にある程度の情報交換をしていた筈だ。波郷からはすべての刊行物の寄贈を受けていたとも書いている。波郷の第一句集『鶴の眼』が昭和十四年八月の刊なのであり、それに先行して『石田波郷句集』（昭和十年沙羅書店刊）も上梓されている。わたしは波郷の次の作品（昭和六年作）からの影響と思っている。

ひるがほのほとりによべの渚あり 石田波郷

作品一

桜井 美保子 神奈川

イヤホンに「聴き逃し配信」の源氏聴く朝の食器を片付けながら
夏負けのからだやうやく回復す少し酸っぱいみかんを食べて
電車内に傘を忘れて一年余そろそろ買はむ花柄の傘

芯まるくなりたる鉛筆四、五本を削れば何か書きたくなりぬ

いつしかに鼻にずり落ちるわが眼鏡直してもらふ校正前日

校正の最中に引く電子辞書電池消耗をしきりに表示す

ベランダの排水口の泥除く眠りの足りて身の軽き日は

花終り葉を繁らせて蔓のばすジャスマシンの鉢に六月の雨

正田 フミエ☆ 栃木

スターチスを父母に供えて語りかける喜の字の年になりましたよと

育苗のキュウリ育ちを案ずるにうどん粉病の発生見つく

うどん粉病キュウリ南瓜に発生す葉に白い斑点すぐ取り除く

うどん粉病に酢水をかけるビッシヨリと葉の裏側も入念にする

ウリハムシはキュウリ南瓜の葉をかじる動作の遅い朝に捕獲す

定植のトマトの育ち元気よく青い実の房ひごと膨らむ

トマト畝にマリーゴールドとネギ苗をネコブセンチュウ回避するらし
大根の収穫せんと引っぱるがなかなか抜けず途中で折れる

飯塚 澄子 東京

八人の午前入浴割当て日男性一人メモ書きて待つ

週一度出合ふ男性の歌づくり私もまねてメモ帳出しぬ

テレビ見つつ入浴順を待つ人も多く居るなりおしやべりはなし

入浴の介助専門の女性二人二、三十分の世話の巧みさ

言葉かけされて自らの前と後ろ石けんタオルで毎回洗ふ

足指の間に入る洗ひ手の心ゆかしき指の動きよ

湯船にて手足伸ばせる三、四分係は去りてゆつたりとをり

送り迎へ車のありて安心す下町の暮らし日々充実す

斉藤 トミ子☆ 栃木

夫と我れ阿吽の呼吸とはいかず察して欲しいと只思っている

家業なる作業は事も無く熟し連携プレーと称えられおり

意に染まぬ夫変えるは難しく我が変わりゆく楽しみ求めて

意のままに動ける身体八十歳今が一番これから先も

山歩き姉妹四人の趣味にして井戸湿原に躑躅愛でいる

「幸せはいつも自分の心が決める」相田みつをの言葉噛み締む

太古よりの音かと思ひ耳澄ます水琴窟の清しき音色

銀竜草唐沢山に見ついたり葉緑素持たぬ真白き姿

胡桃割る歌から断面思い出す石で割りし子供の頃を
横浜に居た頃思えば横須賀へバス旅行なんて不思議な気がする
横須賀の軍港めぐりは住んでいた家から車で三十分の近さ
横須賀港クルージングの説明で日米軍艦目の当たりにす
絵の級友初出展で二人共賞をもらいて皆喜びぬ

絵の出展誘ってくれたが辞退するのんびり気ままに描きたいだけ
自分で運転しなくなっから思う存分買物物できぬ
幹だけを切りてもらいて枝揃えゴミ袋詰めで疲労困憊す

岩 淵 綾 子 岩手

「晩鐘」アート作品額入りを息子が贈りくる家に有りしと
忘れし記憶が戻り絵を見れば何故か知らねど涙出で来ぬ
生業を見守りくれし「晩鐘」の絵守られ来しに卒寿過ぎけり
「魚の駅」 去年開業し大盛況サンマの塩焼きホタテに牡蠣あり
「魚の駅」 子らと集ひて行きたるに大賑はひで引き返し来ぬ
盛岡の霊園参拝のぞめども蹇のわれ子等に托せり
知人よりデンドロビューム頂きぬ今日は母の日佛前に上ぐ

田 中 祐 子☆ 埼玉

緑なす雨のさ庭にあじさいの桃色ふたつひそやかに咲く
風薫る季語がぴったり自転車に次男が来たり五十七歳

やさしさを素直に出せずつんけんとしつつもわれを氣遣い呉るる
市を挙げての年に一度の清掃へ次男と参加は何故か楽しき
勝手を開ければ「わん」とサプライズの愛犬伴う次男と嫁は
ふわふわの白き産毛にまんまるの目玉が踊る七カ月の小犬
庭先の賑わい増して隣家の小母さん笑みていつか加わる

倉 浪 ゆ み 埼玉

サフィニアと朝顔の花をまちがへし夫は朝夕水やりをする
へき面は蔦の若葉におほはれて陽を受け煌く町の教会
涼やかな若葉にまじる紅のざくろの花は燃えるが如し
豆ランプ灯したやうに十葉は水無月の庭広く占め咲く
児童らが作つた小さき鯉のぼり商店街の空を泳げり
園児らがカートに乗りて歌ひゆく愛らしき声は「めだかの学校」
久方ぶり二胡のCD聞き澄ます蘇りくる北京天津

林 美智子☆ 東京

用水際の枇杷の木今年沢山の実を付け日毎赤味増し来る
ムクドリが南面の実を突き出し食べ頃来たかと枇杷の実を取る
小粒にて香り爽やかに酸味あり色暖かき枇杷の初物
半年毎のペースメーカーの検診あり数値上りて歩けと言わる
イギリスの大学生五人が一泊すと大騒ぎして布団を運ぶ
英学生五人のうちの三人は日帰り温泉好まずと孫

英学生静かに箸と苦戦しつつ朝食済ませ帰り行きたり

紫陽花にも畑にもやさしく降り注ぐ我が誕生月の雨は好まし

松 中 賀 代 ☆ 高知

馬鈴薯の摘花を始めるその後紋白蝶が二頭舞い来る

今年も幸せな事夏やさい十品を植える意欲あること

切り藁を敷きつめてやる土の上西瓜の苗は好きに広がる

夏野菜の株元覆う切り藁の中に稲穂が混ざりて匂う

昨年と同じことを思ってた西瓜作りは最後の年かと

栗の花に続けて咲くはネムの木の薄紅色のやさしき花なり

黄に熟れる枇杷の実漁るカラス二羽朝早く来る二羽は夫婦か

つくね芋植えた事すら忘れてた三個の種芋赤い芽を出す

鈴 木 やよい 東京

夜の土手歩みつつ思ふ義姉のことおのれの古いも考へ合はせて

今日はただ山の緑を楽しめばよし木洩れ日受くる地蔵の優し

支へ求め数多の人が触れたるか岩場の木の根に黒光りあり

みづみづしく緑に光る石路に濡れてゐるやと思はず触れる

宙に伸ぶる藤づる伝ふ雨粒の落ちてつる先驚きて揺る

結局は下手のままなり料理本ほこりを払ひてまとめて捨てる

黄ばみたる昔のレシビも挟まりて努力はしたとこれで諦む

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

バスケット第四クォーター五分過ぎエース覚醒す逆転のシュート

第四クォーター残り0・六秒に息を止めて勝つてと祈る

ブレイクスの勝利にファンは湧きかえる声ひとつ無し相手のベンチ

辛き事乗り越えて今優勝のトロフィー掲げる笑顔弾けて

ブレイクスの凱旋パレード沿道の歓喜の声は空へと届く

選手たち心輕輕と動きたりファン感謝デーは笑い声高し

優勝の瞬間の録画また見ては味わい返す興奮と感激

バスケットのシーズン終わる目覚めてはため息の出る彩りなくして

村 上 美 江 岩手

冬物を出したり夏物着たりして初夏の姿見に落ち着かずをり

幾房の藤の花揺る紫の香りのたちてカーテンのごと

枝分かれこれでもかとの手を伸ばすますます藤は老いて魅了す

それぞれの家族の予定を組み合はす吾は結局母との宿へと

一生に一度か母と宿泊す夫居ぬ同士の思ひを持ちて

楽しみにしてゐた宿に母と行くゆつくり何から話ませうか

母とわれ互ひの背なを流し合ふやつとの孝行十年振りの

特別に案ずることも今は無し今宵の雨よしつとりと降れ

伊 澤 直 子 ☆ 東京

春先は隣家の大き杏の木花いっぱい楽しみくれる

庭に生うる蕾の百合を生けたれば次つぎ開いて日日の楽しみ

アフクリント明るくやさしい色付けに深い思想の込められたる絵描かれる女性はみな美人にてアフクリントの写真に似たり
浮世絵の五人展に行ってみる観賞できぬ程の混雑
写真とは全く違う深みあり名立たる東海道五十三次
入口に戻れば人もまばらにて閉館真際のゆったり気分

乾 義 江 ☆ 茨城

杉木立の側を通れば突然にホケキョホケキョと美声響かす
卓球の日本選手の成長ぶり巧みにこなし敏腕ふるう
嫁御より土佐の名産送り来る年に一度の母の日なれば
大臣の小泉氏動けば棚の米すっかり消えて雲隠れする
減反をすれば二年は不作と聞く今年の作の気になるところ
絹糸の混ざる編み糸進められ孫の上着に一月掛かる
つるつると滑るダイヤの編み糸に巡り会うとは初めての事
近隣の斉藤さんより植えおけとトマト二本とコキア戴く

螢 永 光 徳 子 ☆ 東京

夜八時雨戸繰りつつ庭を見る石路の葉に光るもの見ゆ
ギョツとして光りの正体確かめに庭に出づれば光は消える
家に入り小窓からそつと眺むれば雨風に乗り螢飛び交う
朝の陽に石路の陰に身を寄せる黒き虫達これが螢や
若き日にシンガポールの夜の川小舟で眺めし無限の螢

幼き日七夕祭りの帰り道姉と眺めし螢を想いぬ

「海」静かなり

松 本 英 夫 東京

電源の書籍を会社へ寄贈して書棚は空にさらば半生
朝朝のさうぢ水やりなし終へてしばしゆらりとバツハのフーガに
いつもなら真つ暗闇のこの階段あかりの灯る行きし人あり（人感センサー）
「習ふより慣れろ」は今や進化するスマホのための格言と知る
あたたかさまづはすなほに喜ばううだる暑さはすぐ来るけれど
ドビュッシーの「海」静かなり遠くにはサイレン駆くる梅雨明けの朝
そよ風にさそはれてふと出でたれば隣の夕食カレーなるらし
フレッシュな五人の歌手たちをどりをり外は新たな年を待つ闇

稲 津 孝 子 福岡

庭の木に生れたる小さな蟪蛄が女郎蜘蛛の糸に絡まれてをり
制作のロボットの腕ぐらゐにと此度は孫に少し餘計に送る
引退の横綱モンゴルの照ノ富士日本人の精神言へり
暑さ長く牛の体力回復し宅配牛乳の配られてきぬ
木の枝に黒き眼の幼蟲が我を見るなり頭を上げて
ベッドにて意識の戻り思ひたり自宅に歸らむ自分の足で
ベッドに寝て我を案じてくれてゐし夫を思ふけふまた思ふ

戸 部 田 とくえ 福岡

この夏もドクダミぬきて乾燥せる作業近づく梅雨入り前の

夏野菜また花の苗を植ゑてのち雨の豫報に安堵してをり
金柑の甘露煮にせむと千切りくる一粒づつのしみるいとしさ
豌豆の実りに感謝つぶやいて支柱外しぬ蔓かれはじめて
玉葱の収穫しつつ年の暮れか細き苗を植ゑし日のこと
草とりをしつつ安らふひとときの繁みに揺るる雪の下の花
宿の庭ホタルの乱舞に放心すお目にかかりて一途に礼を
苗代田の多く見らるる由布院の蛙のこゑとホタルに安らふ

大塚 照美 兵庫

窓したにずらりと紫蘭の株ふえて三十年経つ震災ののち
三十年未満か豫報の南海トラフそれぞれの自助おもふ改めて
電線のあたりを上下せる鴉のけさの低さはさくらんぼうか
買ひ過ぎの荷を持ち替へて見上げたる雲にのせたや小舟に似たる
広場にてしばし見惚れる一輪車の少女は照れるわれの視線に
杖あらば京都ぐらゐと乗り気でも躰が否とふ上村松園展
入梅のちかき並木路さはさはと五月の風吹くみどりとわれに

三 好規子 福岡

この年は夫の卒寿に長男が還暦まごは二十歳の節目
花の頃は別れと出会ひの季といふ我も家族と離れ遠く来ぬ
施設には老い三十人ほど暮らし居て今日より我も仲間入りせむ
高校生の男孫が突つぱり棒五本にて廁の隅に棚つくり呉る

骨折時に娘が我を洗ひしごとスタッフが入浴に介助をし呉る
姉川様の時折り歌に詠まれぬし背振山みゆる施設の窓に
背振嶺かすむ施設の四階に遠き娘の躰調おもふ
高三の孫の甲冑を寄贈すれば施設の玄関にすぐ飾り呉る
施設にて五月五日の入浴に一人一束の菖蒲浮べ呉る

須藤 紀子 埼玉

沢沿ひを小滝に続く山道は人に会はぬが何より嬉し
滝壺の周囲の岩の傾きが見せる大地の躍動の跡
一本の胡瓜に雌花咲きたれど雄花無ければむなく凋る
雄花ばかりの胡瓜に雌花一つ咲き紋白の来て花粉を配る
昨日今日雨降り続き庭に生ふる草木のちから奢るばかりに
走らされ外国にまで行かされて骨折ひとつで殺さるる馬よ
犬の写真数多飾ればその犬の生身の亡きがさらに悲しき
わが内に記憶となりし人々の仲間となりきこの犬もまた

佐藤 靖子 東京

杉並区はしより「クイーンズ伊勢丹」去り安さと質とふやオコーの来る
この年の緑に壮快なるわれに翳のさしくる彼の毀さるる国
掛けよかな思ひ思ひてゐるうちにその友かけ来のちのぬくもり
猫の毛を梳きてやるのに「おまけのおまけの汽車ポッポ」それのみに終ふ
ミニトマト改良されて大玉に枇杷よ願はくは桃のごとくに

あさ咲ける茗荷花ごと摘みとりしと思ひつつ刻みてをりぬ
 湘南のモノレール多摩モノレール用なくなりぬ人居らずなり
 甲斐のなき看病に通ひしそちこちの道は心に暗く残んぬ

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

淡き黄の花びら次第に白くなる初めて咲ける庭の忍冬

玄関のチャイムを鳴らし帰省する息子は此度も連絡なしに
 紐解きてひらけば木の箱木の蓋に納まるみやげのシウマイ弁当
 寝転びて整形外科の膝体操なして伸びたりまろき背なかの
 寝る前の膝体操を続けをり回数減らし種類を減らし

いいことがあるよと友に誘はれて来たる神社の初めての絵馬
 三種類の絵馬から選ぶ白馬の絵たんに白馬が好きと思ひて

江 藤 ひさ子 大分

今年また独り生えにて生るトマト烏よ御免ネットに覆ふ
 庭一面を独り占めして舞ひ舞ひつ紋白蝶の午後の暫く
 又もとて草に屈みつ満開のつつじを見むと出でたる庭に
 小さきも見れば即座に耄る草見逃せぬ性われの通常

玄関に床の間トイレに紫陽花が居場所得たりといふがのすがた
 庭に咲き鉢に競ひて咲くつつじ催事場のごとその彩り

「けふはここまでにしようね」と又もいふ施設の友に掛けたる電話

鈴木 計子 東京

折り込みに入りたる写真の探し猫電柱にもあり今日も貼らるる

強き風に揺るる電線うつる壁かげは増幅して壁に揺る

沖繩の海水のみと記さるる結晶光る塩を買ひたり

乗り換へに往きかふ道の人の波当然のごと左側ゆく

地に映る木もれ日の影ゆらぎある林の道に緑の風受く

好きなのにすぐ名の出てこぬ矢車菊長く矢車草と思ひき

生協の注文書にて頼む米抽選となりいつもはづれる

松園に触れたる授業の後きたる生徒が私の曾祖母と言ひき

石 渡 静 夫 茨城

農相の発言民を愚弄する米を買へない人多きなか

売るほどに米があるなら何故分けぬ大臣まさに特権階級

辞任して後は知らぬと言ひたげな農相の顔に怒り増幅

政治家の無策か米価の高騰は起こるべくして起きた災難

皺寄せはいつも農家かスーパーのキャベツ特売一個五十円

備蓄米が放出されても店頭に並ぶことなし止めたるは誰

まだ米は有るか兄に電話する困つたときだけ頼る羞ぢらひ

電話してよかつた米の二袋なら有るからいいよと兄は応へる

西 村 邦 子 兵庫

万博に伴ひ関西に集結する国宝展に三都市を巡る

美術会リーダーガイドに領きて仲間と共に学ぶと言ふこと

それぞれの違ふ感性知ること自分の中の視野が広がる
縄文のビーナス土偶はふくよかで妊婦を思はす丸い曲線
一本のナニワイバラの蔓が伸びリビング出窓の雰囲気つくる
軒下にナニワイバラの蔓が沿ひ陽ざしやはらぐ緑のカーテン
妹と歳の差八歳写真のそばにはいつも弟の居て

中 島 千加子 東京

あぢさゐの小さき毬にいろ生まるまだ薄やかなみどり紫
掌にのるほど小さき紫陽花はまだ定まらぬ未来の色なす
単身の高齢の方の笑顔を見たとし訪問緩和ケア医のことば
行政にとりのこさるる孤立者の居場所作りはいつでも市民
この街の市民が動き始動する「多世代のいえ」にあふる笑顔
この街に初めて友ができたる日やさしさ満ちる「多世代のいえ」
優しさに触れやはらかなるころバスには乗らずゆうらり歩く

野 崎 礼 子☆ 埼玉

同郷の人の営むおやきカフェ若い夫婦で切り盛りをする
高校の後輩と知るカフェに来ておやきの味が特別美味い
栄養士の資格持ちたる後輩の料理の味付け薄めで好み
公園に一人佇む人のあり妻を待つという昨日も今日も
炎天下水分補給を促せば僕は医者だと背筋を伸ばす
嫌なこと曖昧のままにしておけば一歩も前に踏み出せずおり

マスメディア都合の良き事のみ流す真の見極め試される時代
シンプルに美味しいの一言あるだけで単純な我頑張れるのに

高 橋 耀 子☆ 埼玉

米不足輸入米と大騒ぎ早苗の上燕飛び交う
カリカリと小梅を食めば亡き母の大きな手指も含み笑いも
三時間都合をつけて出席の歌会も夫も後髪引く
桑の木にあまたの小鳥が集いたり天の恵みの果実啄む
杖をつく夫と共に手を挙げて歩調合わせる横断歩道
青波や川面引き裂く風が行く橋より見える季節の移ろい
ゆったりと花や風景愛でながら夫と歩く川沿いの道
富士山や秩父の山並み咲く花も一期一会と心にとめて

飯 嶋 久 子☆ 茨城

週一度通うシルバー体操に近頃男性参加者ふえる
毎日が連休ですと笑う人ゲームに興じいきいき語る
三ヶ月休まず通いし人たちは皆勤賞受くこぼれる笑顔に
田の畔に白つめくさの花ざかり花輪を編みし日はるかかなた
四五日前立ち話せし友人の突然の訃報常会を走る
白血病と余命宣告されおりしとただ呆然と立ちつくすのみ
覚悟して前撮りせしかふくよかに笑顔の遺影に涙にじむ
残されて車椅子に謝辞のべる夫君の姿しのびがたし

六月号作品一評

小林 芳枝

からし菜の苗の植付け終わるころツグミ現れ歩いて止まる 正田フミエ☆
何処かでじっと見ていたように作業の終り頃に現れたツグミは土の中から出て来る虫などを食べたいのだろう。苗を植えている作者と互いに相手の様子を窺っているような緊張感がある。

内転筋意識しながら歩きおり内股歩きに拇指球つきて 斉藤トミ子☆
予期しない病を克服された作者だが今は体力を戻し確実に力をつけることに専念されているようだ。まず歩く事に重点を置き内転筋を鍛えようと励む。脹脛から力をつけてゆこうという作戦だが日常生活の中でのこうした努力に敬服。

「みんなで迎えに行こう」待ちわびた夫の退院メールが踊る 高橋燿子☆
上の句の声掛けが全てを伝えている。スマホのラインを使い嬉しいメールが波となって喜びを膨らませてゆくようだ。

六月号作品一評

藤田 夏見

断捨離は過ぎ来し私と出会ふ旅思ひ重なり捨てては難儀 田端五百子
暮らしの中で買い求めた物。身近な人の思いの籠った物であったり、その時とかが鮮明に思い出され不用なものとは思えないのだ。難儀にいたく同感。

二十日程遅きと思う揚げ雲雀幼き声の鶯も鳴く 斉藤トミ子☆
目に留まるもの、耳に聞こえるもの。移ろう季節の暦は作者の中にしっかりとあるでしょう。雲雀も鶯も二十日遅れだが会いに来た。その事実だけを詠まれている。

「みんなで迎えに行こう」待ちわびた夫の退院メールが踊る 高橋燿子☆
暖かな気持ちの良い一首。「みんなで迎えに行こう」と家族がメールで呼びかける。その活字は踊って見えるのだ。自衛隊の大型ヘリが目の前で海水くみあげ消火に懸命 岩渕綾子

旧姓で名前呼び合う同級会十八に戻る新宿の夜 野崎礼子☆

クラス会は年齢を重ねる程に喜びが深くなるものかもしれない。一瞬で学生時代に戻れる感慨がリズム良く詠まれていて無駄がない。結句も映像を浮かばせてくれるような感じで効いている。

放置せる畑の一角草取りて耕すあした苗買いに行く 林美智子☆
暫く作物を植えられなかった畑に今年は苗を植える余裕ができた。少しずつ耕して楽しむ様子がみえるようで読者も元気が出てくる。自分で育てた野菜の美味しさは格別であろう。

半年の療養生活終わりつげ今回は娘のお礼参りと 飯嶋久子☆
娘さんの病の完治を読者の一人として心からお祝いしたい。神社にお礼参りができてよかったですね。

桜見にいつでも行ける自由あり若い時には無かった自由 松中賀代☆
子供が巣立ち、家族が旅立った後の一人暮し。自由に時間を使えるようになって

ニュースを見た人達も固唾を飲む思いで何日かを過ごした。目の前に繰り広げられる自衛隊の大型ヘリによる消火の様子に感謝の思いをストレートに詠まれた。

ああ何と幸福な木なり標本木注目あびて拍手も受ける 倉浪ゆみ
開花宣言を待ちわびる作者の素直な心が真っ直ぐに届きました。

桜吹雪、田んぼのレンゲ満開なり二人の孫の入学祝う 林 美智子☆
孫達の成長の節目の入学とは嬉しく誇らしい。桜吹雪とレンゲの満開は殊更の祝福と祖母の心を満たした。

桜見にいつでも行ける自由あり若い時には無かった自由 松中賀代☆
家族を支える立場を当たり前、という時代の風潮もありいつも自分を後回しに生きてきた。そんな時代でした。私なども地縁血縁の中で縮こまっていました。桜の花満喫ですね。

唐突に蓮華の花の咲く頃と見たい思ひめぐらしてをり 戸部田とくえ

た現在の暮しを楽しまれているようだ。

おだやかに会釈交はしてすれ違ふ墓参の午後はゆつくり流る 鈴木やよい
墓地の間の広くない通路ですれ違うと知らない人にも頭を下げたくなる。下句にその雰囲気うまうま表現されている。

ふはふはと天に昇つてゆく犬よ嬉しからうねその軽き身が 須藤紀子
自分の腕に抱かれて最期を迎えた犬の感触を「ふはふはと天に昇つて」と表現して温かい。弱った身を動かそうとしていた姿が心に刻まれているのだろう。

毎年のことに候ふ我が家より早き芽吹き斜向かひの柿 齋鹿ミヤコ
芽吹き時期にどんな違いがあるのか毎年となると気になるのかも。柿の木同士には何の思いもないだろうが目置いているような丁寧語が面白い。

玄関のチャイム押すとき緊張す町内会費の集金に来て 山本三男☆
町内の役員となって集金に回り、チャイムを押す瞬間は少し緊張する。微かな心の揺れを捉えて繊細な心がみえる。

そう。同じ思いを巡らせています。唐突に。です。稲作の始まる前の田圃には見渡す限り蓮花草が植えられていた。今もそうゆう風景はあるのだろうか。

針垂るる人の動かず見る人の動くことなし風ぬるき昼 松本英夫
うらかな午後だろうか。釣る人も、見る人も、垂れたウキの一点の動きに集中しているのだ。しばらくその風景の中に作者もおられたのだろうか。

毎年のことに候ふ我が家より早き芽吹き斜向かひの柿 齋鹿ミヤコ
「毎年のことに候ふ」の上の句の何か物申したい口ぶりがおかしく、それがわが家より毎年柿の芽立ちの早い斜め向かいの柿 と言う確かな季節の歌。

お隣の車に初心者マーク付くあの子がそんな年になりたりや 鈴木計子
お隣のあの子は成人になったのだろう。話さなくても車につけた初心者マークで、ああ車の運転を始めるのだと知れる。顔見知りのお子さんの新しい一歩に感慨。

■転載歌……「短歌往来」6月号より

長い刃の鋏

桜井美保子

エスカレーター左に立てば右側を勤めの人ら駆け降りてゆく
渋谷から横浜に向かふ東横線坐して休らふ病院帰り
「砂抜き」と「砂出し」言葉ふたつありスマホに探す
蜆のレシビ
サラダスピナー底の平らが具合よし蜆をひたす昼
から五時間
春の宵しばらくぶりの蜆汁忘れてゐたる味を楽しむ
亀戸に住みぬし頃によく買ひし「砂抜き済み」の
浅蜆と蜆
鉛筆の三本組を買つてみる机上の筆立てに新しき
風
母つかひし鉛筆削りリビングに電動の音たまに響
かす

メモ取らず集中して見る文学展こころが動くそれ
だけでよく
それは違ふと言ひたきことの二つ二つ風に飛ばし
て坂くだり行く
公園の落葉の中に紛れ込む小さきすみれ踏みさう
になる
だんだんと手に馴染み来る長い刃の鋏に新刊書評
切り抜く
眠りぎは頭の中に今日あひし友らの声が暫くひび
く

新刊書（飯塚書店刊）

本体定価 1400 円



◆創業1948年、詩歌と共に77年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】 形容詞・形容動詞の 短歌コレクション1000

日本短歌総研編著

四六判1430円（税込）



作歌において最も重要となる形容詞・
形容動詞の使い方が優れている、古典
から現代に至る短歌作品1000を、
現在活躍中の歌人6名が選歌。文法
の習得、作歌に役立つだけでなく鑑賞
も楽しい作品集となりました。

固有名詞の短歌 コレクション1000

日本短歌総研編著
1430円（税込）

恋の短歌 コレクション1000

日本短歌総研編著
1430円（税込）

短歌用語辞典 増補 新版

日本短歌総研編著 四六上製箱入536頁 4400円（税込）
短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引用。他に
類書のない実作者必携の辞典。見出し語二六〇四・引例歌七三四七首

短歌文法入門 改訂 新版

日本短歌総研編著 四六判並製264頁 1980円（税込）
作歌に必要な文法を豊富な例歌と詳細な活用表で徹底明解。
【ご購入はお近くの書店か直接小社まで。歌集出版も承ります。】

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 図書出版 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。
- 投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）
- 本部事務局 江戸川大学 中島金太郎研究室内
〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四
☎ 〇四（七一二）〇六六一（代表）



八月集

本間 志津子 山形

迫りくる五月若葉の萌え立つをわが身に受けて深山を下る
水張り田の二つ三つ見え風渡る庄内平野に田植ゑ近づく
中腹に種まき爺さん見ゆる程冠雪溶けたる鳥海山は
見晴るかす遠き地平に出羽丘陵の低き山なみ青く続けり
妹と花冠を作りしよ白詰草は露地に溢れて
五月晴れダイヤモンド・プリンセス停泊の北港埠頭見学多し
海のホテル空の碧さがよく似合ふ思はず階を数へてゐたり
北港の帰りの道に白き花ニセアカシアに風強く吹く

梶尾 栄子 兵庫

ブラボーと叫びたくなるかなめもちの赤美しく続く道行く
好物はバラの花と葉こがね虫の触るれば忽ち落下す丸き身
コミバスの集団下校の子等降りて家までの道弾ける声は
マスク越しに患者は全てを見られゐて医師の素顔は謎のままなり
北風に真向ひ行く道風除けになりてくれたる夫の背あらず
再三の友の電話に時として居留守を使ふ氣は咎めつつ

ローションの残量知りゐるごと届くキャンペーン案内心の動く
降り続く春の氷雨に古納屋の軒に静かにすずめの並ぶ

東 ミチ 青森

子の家に大事にされて長居して心切替へて居場所に帰る
青森の一人の我が家に戻るれば風除室に飼ふ保護猫の鳴く
花咲かぬ水仙を掘りながら思ひをり球根にも老いがあること
大木の庭の椿の花散れば朝に掃き又夕べにも掃く
轟音を放ちてヘリコプター三機ゆくガザ地区の悲惨につながりありや
昨日今日と同じ時刻にヘリコプター自衛隊駐屯地が近くにありて
歩かねば歩かねばならぬ歩かねば目標の生協までどうにか歩く
生協へ往復歩いて千三百歩余り靴脱ぐ土間で膝とすねを揉む

藤田 夏見 ☆ 広島

「おばさん」と笑顔になりて独りごとまた言い始むいとこの息子
独り言呟くように見えたと彼個性だこの障害は
三十五年家に籠りたる還暦の子を守るいとこ要介護となる
いとこの子の障害者年金請求は謎解きのごと証明得るまで
役所での秩序と公正なるものが壁となりたり申請者には
獣道始まる斜面に笹百合のことし一枚の葉の芽吹きたり
笹百合とススキ笹竹さみどりに目を凝らしつつ鎌を当てゆく
山肌の草払いつつ歩みゆく鳥の囀り笹百合の咲く

小川春美先生を偲ぶ

永野雅子☆東京

三十七歳にて茶道の世界に飛び込みたり作法も分からぬ素人の我オレンジの四角い布は袱紗といい畳んで使うと説明されき袱紗持つ師の指先が軽やかに畳みゆく形難しかりき

お辞儀する師の指先の美しさに心ときめき見入りていたり師は常に点前は身体で覚えよと新入りの我に静かに語りき笑顔優しき師は九十九にて世を去りぬ天寿全う冥福祈る世話になりし恩を返せぬ我は今精進続ける事こそ供養と

川俣美治子☆栃木

爪は何故こんなに早く伸びるのか切るたび思うこの歳になり雨降りの五月の朝に何を着る寒さ戻りて外を眺むる

虫啜え歩くすずめの飛ぶまでは目を離せずに窓開けられず履き慣れた少しヨレヨレのGパンの安心感にまだ捨てきれず夕暮れも気温下がらず風もなく梅雨入り前に気持ちちが萎える洗濯後外干し出来る幸せは取り込む時の匂いと手ざわりストーブと扇風機とが並んでる気温差激しき六月の部屋

「まだ」か「もう」か何か始めるその度に歳重ねても「まだ」で生きたい

井上鈴子山形

雨の日は昨日の蔵の始末する「晴耕雨読」の兄思ひつつぜんまいを茹でて広げる莫座の上夫は何度も揉みて乾かす

金平糖の缶に溜めたる五百円玉袋に移し子らに持ちゆく

柔らかき若葉を覆ひ薄紫の藤の花垂る高速道路沿ひ

尾花沢の道の駅にて懐しき黄粉団子食む生家への途中

小さき苗の田毎に夕日入りこみ橙に染まる庄内平野

友の園の桜桃の実はまだ五ミリ淡き黄色が紅くなるを待つ

大手毬の白き花びら散り敷くを初めて見たり生家の裏庭

早乙女イチ☆栃木

青青と若葉の中にミカンの実ビー玉ぐらいおおきくなつて

今年またミカン食べられるうれしくてそつとさわりぬ大きくなれと

高高と柚子の実見える朝の日に爽やかに丸くみどり葉のなか

益坂順子福岡

いつまでも眺めてゐたき富士山よ雲取山の頂に居て(雲取山)

渡渉より岩場へつづく緊張を三葉躑躅に癒されてをり(両神山)

奥秋のキャンプ生活三泊をのめこいの湯に疲れを流す

コシアブラ天ぷら旨しキャンプ地の武甲温泉タープの下で

ひと日のみ番場通り散策と「わらじカツ」喰む暖簾をくぐる

目標の百名山の百座目の記念バッヂにアカヤシオ咲く

下山後に不意をつかる仲間より声高らかな万歳三唱

朝五時の展望デッキに見る朝日旅の終りの幸せの色(名門大洋フェリー)

帰宅後の蕩けるやうな感覚に留守居の夫の「俺も疲れた」

残響集

岩村 知康 長崎

梅雨入りの前に急ぎて馬鈴薯の「男爵」を掘る我が小農業
遅植ゑの馬鈴薯「でじま」花咲かせ我が野畑にまだ太りゐむ
庭隅に挿木をしたる紫陽花の枝伸び咲きて色鮮やけし
庭植ゑのあぢさゐの枝の伸びさかり去年も今年も花を咲かせる
甘^い諸^も蔓を植ゑつつ空の雲見上ぐ梅雨入り近きけふ五月尽
落花生去年に穫りたる種を播き伸びゐるみどり苗のたのもし
昨日植ゑし落花生の苗根付くらむけふは梅雨入り農の休日
梅の実の収穫されず散りばひて降る長梅雨に腐^{くた}さるるらむ

塚本 節子 ☆ 茨城

出張先はオマーンと息子のライン来てしばし想いぬ中東の空
心配するなのひと言添えてフライトの便のみを息子は告げて来たりぬ
世界地図を卓に拡げて探しおり息子の出張先オマーンは何処
百九十六の国旗の入る世界地図指にてなぞりオマーン探す
上奥歯に前歯も欠けて治療せり歯科医に通う六ヶ月間
車にて歯科医に通う六ヶ月片道二十キロのみちのり

息子より贈らるる紅茶飲みながら治療したる歯でピーナッツ味わう
公園を丸洗いして雨の止みユリの若葉の緑増し来る

山崎 猛 ☆ 埼玉

与党から野党に変われば3・11と同じ地震のまた来るといふ
かの日には五十人学級八組の同窓会の顔ぶれわずか
夢を持ち生きよと教えし師の言葉今も抱きて朝の起床は
文字を打つかわりに声でAIに書かせるメール吾がスマホでも
若い娘が葬儀場でもスマホ見るはびこる「ながら」一人二人ならず
米価上げ国民さわぐ世の中に小泉農相の施策うけたり
曇天の梅雨の時節に届きたるメロンの味は悲しみの味

片桐 美穂子 ☆ 神奈川

ズッキーニ育てとりいれ味わって食育をする我が職場なり
手のひらに乗る球形のズッキーニ焼くとほんのり甘みがわきくる
水たまりひるまず入り濡れる子ら苦笑いして眺める母たち
自家製のミニトマト入れた弁当を食する幸せ昼休憩に
フィットネスクラブをやめて三ヶ月体重増えずひと安心す
父と行く日帰り温泉出るときに落ち合う場所はアジサイの横
アジサイの挿し木育つも花芽出ず来年の梅雨の宿題としたり
かけっこが好きな子らから誘われるハンディをもらってよいスタート
見えぬ敵やつつけながら進みゆく男の子らの活力頼もし

六月号作品二評

井上 萱子

わが家から徒歩にて行ける距離嬉し買物難民救はれてゐる 本間志津子

一連の中のいろは蔵パークは商業施設。作者の家からは歩いて行けるといいう。高齢になり運転免許証も返納すれば、買物難民となる。「救はれてゐる」に実感がある。

亡き母が大島旅行で買い来たる椿今年も満開になる 川俣美治子☆

母が亡くなっても、季節が来れば椿の花は咲く。年々に花数も増え華やかに咲く椿と、亡き母との距離感が空しい。

長女は元氣そうだった安心して夕食の弁当買って帰ろう 早乙女イチ☆

長女を見舞った帰りの歌。思った通りを文字にしているが、元氣そうだった安堵感は食欲につながる。「弁当買って帰ろう」に、本能として表れ人間らしい歌。春彼岸きのうは暑く今日は寒く着るもの重ねてストーブ点ける 卯嶋貴子☆

暑い日も寒い日も長続きしない昨今、困るのは農作物と着る物である。着るもの重ねてストーブ点ける、具体が生きた。

若い日のあのドキドキとワクワクと自由気ままは過ぎて戻らず 安川敏子☆
青い果実のような若さを表現した上の句、それを懐かしむ下の句、「過ぎて戻らず」がしつとりと落ち着かせた。

不細工な里芋だけど寒き春けんちん汁を鍋にいっぱい 加藤富子☆

不細工な里芋、鍋にいっぱい、これだけで人間の温かさ、鍋の温かさが伝わる。湯気まで見えそうな春のけんちん汁。

畝盛りてきぬさを蒔く楽しみは早春の花初夏の実り 大野 茜

畝盛りてという作業の手順に実労働が見える。さやえんどうの花は白やピンクで可愛らしい。そして柔らかな緑のさや、きぬさを丁寧に詠み爽やかな歌。

クリーニングに出さむと入れたる袋より取り出して着る花冷えの日に 松居光子
もう着ることもないだろうと思わせるこの頃の天候。「取り出して着る」ここ

には共感させられた。

信号のあかりを糧に灯りたるフットライトかたんぽぽの花 藤田英輔☆

たんぽぽの明るい黄の花がフットライトのようだという新しい発見。場所は信号のあかりの届く所、多くを語らず、情景を鮮やかに表現している。

寡黙なる漁師は更に口元を閉めて生業の海に出て行く 松崎みき子

寡黙なる漁師には、実直に漁に励む姿がある。更に口元を閉める理由は、前後の作から大規模な山林火災と思うが、口元に視点を置いて内容の重さが伝わる。

床面積九十九・八七坪先祖代々武道の家蜘蛛の巣屋敷と我は呼ぶ 谷田律子☆

床面積を数詞で存在の重さを表し、由緒正しい武道の家も、時代の変遷で廃れた哀しみを下の句に揶揄して詠む。

泊りたる宿の窓より暁雲見え朱き大きな朝日に掌合はす 水澤タカ子

松島旅行の一連だから、松島湾の朝日だろう。朱く大きな朝日の神々しさに、思わず手を合わせる大和民族の精神性。

六月号作品二評

江波戸愛子

いろは蔵パーク本日開店す巳年三月高校跡地に 本間志津子

わが家から徒歩にて行ける距離嬉し買物難民救はれてゐる 同

一首目は、近くに新しいお店ができた喜びを詠んでいるが、高校が廃校になるほどの少子化を憂う。筆者の住む市も小学校や中学校の空き教室が多いと聞く。

二首目、今までは車で行かなければならなかったのだらう、下の句は歩いて買い物に行ける喜びに溢れている。

部屋ぬちに鉢植色々咲きをれど今宵は梅酒で桜に乾杯 東 ミチ

この桜は弘前公園で剪定された枝と前の歌にある、桜の名所百選の花を見ながらの梅酒は格別な味だったと思う。

満開の桜の枝を見上げれば青のキャンパス埋めて咲きおり 川俣美治子☆
青い空に桜の花はよく似合うといつも

思っている。青空をキャンパスに見立てて詠んだ作者の感性が素晴らしい。

塀の上のイソヒヨドリを写真に撮り美

しき声をスマホにて聴く 卯嶋貴子☆

イソヒヨドリは幸運を運ぶ鳥でエネルギーまで与えてくれるらしい、そして鳴き声も美しいと聞く、写真を観ながらそのうつくしい声を聴いている作者がみえるようだ。

新しい歌会が始まる四月からの楽しい事をあれこれ思う 安川敏子☆

四月から川越で始まる歌会を楽しみに待つわくわく感がよく判る。

オーケストラの演奏会楽団員も澁刺とマスク外して表情豊か 加藤富子☆

マスクは個人の自由になり、マスクを外して演奏をする団員の豊かな表情を見ることが出来る喜びを詠む

畝盛りてきぬさを蒔く楽しみは早春の花初夏の実り 大野 茜

野菜の花はともうつくしい、そしてその実を収穫し食卓に出すよろこびを詠む。新鮮な野菜はとても美味しい。

二十年近く故障なきエアコンを買ひ替へること心に決めぬ 松居光子

二十年ものあいだ一度も故障をしないエアコンを買い替えることに決めたのは最近の異常気象のせいかもしれない。万が一にも真夏に故障をした場合には電気屋さんの対応が遅れることがあるかも知れないと考えて早めに決めたのではないだろうか。

三月の山火事に鳴る警報は震災の音身体震へる 松崎みき子

警報の音にあの日の巨大地震を思い出すという、結句の身体震へるがあの日の作者の恐怖を語っている。

日の暮れて待ちくたびた児は目の中に「おかあさんといっしょ」を写して 藤田英輔☆

いつも預かっている児なのだろうか。仕事から帰ってくるお母さんをまっける児を預かりみまもっている作者の優しい眼差しが感じられて胸が熱くなってくる。

六月号作品三評

桜井美保子

使ひなれたる辞典に手がゆき電子辞書は購ひし日のまま机の上に

佐々木政子

作者は紙の辞書を愛用。結局それが一番使いやすいのだろう。電子辞書も国語だけのものでないなら、内蔵している他の分野の辞書を、少し活用してみるのも面白いかもしれない。

弥生にして二十七度の予報あり畑耕して大汗をかく 高藤朱美☆

三月にして二十七度とは考えられないような暑さ。汗びっしりの農作業である。異常気象には驚かされるが、その状況に負けずに働く姿に元気づけられる。職場には免許証ある女性珍しく何処へ行くにも駆り出されたり 塚本節子☆ 運転免許証を持つている女性が珍しかったという時代が背景にある。運転できる作者は職場で大事にされて大いに活躍した様子。過去回想の作品だが自信と

力強さがあり懐かしさを湛えている。

看病の戦い終えて従妹の眼優しさ戻り微笑みこぼる 立石節子☆

多分長い期間の看病だったのだろう。それが如何に大変なことだったか、作者は察しているのだ。従妹への心からの労いの心が籠っている。

漸くに葉を広げたるサニーレタス朝餉のサラダの少し華やぐ 井出裕子 自分で育てたサニーレタスを収穫し、早速朝の食卓へ。美味しいことには違いないが、サラダに華やかさも演出できて嬉しいことである。小さな喜びを大事にしている様子が感じられる。

白鳥よ喰ひ飽きるまで喰つてゆけ北行く長き旅に備へて 羽田孝輝 白鳥達は秋になるとシベリア方面から日本へ渡ってきて冬を過ごす。作者にとっては身近に目にする渡り鳥だろう。北へ帰る旅は長い距離を飛ばなくてはならないのだ。白鳥達への優しい心がある。知る人の無くて気楽なこの街に十年経ちて会釈増えたり 金子八重子☆

新しい土地で暮らし始めてから十年、顔見知りの人も増えてきた。深い付き合いはせず、会釈だけ交わす間柄でも安心感がある。日常がさりげなく伝わる。

駅中の賑わう店に立ち寄りて駅弁買いて旅心地する 首藤文江☆

気軽に立ち寄れる駅構内にあるお店で駅弁を買った。その瞬間からの「旅心地」である。生活の中で、ちよつとした楽しみを見つけた時の弾んだ心。

筆まめな亡父の手帳の最後には掠れる文字で「今日医者に行く」 長谷川 剛

普段から書くことを億劫がらなかった父の最後の言葉とその文字。遺された手帳に在りし日の父の姿が浮かぶ。父への深い愛情と尊敬の眼差しが感じられる。雪囲い外してみれば路の臺の芽吹きはじまる陽を吸い込みて 長澤千恵子☆ ようやく春。雪囲いを外す時が来た。そこに芽吹いた路の臺を見つけた嬉しさが明るく詠まれている。「陽を吸い込みて」はどっしりとして穏やかな結句。

六月号作品三評

橘 美千代

中空に明かりのこりて街とほき東も西もしづまりゆきぬ 佐々木政子

食堂にて食事終れば隣同士少し話して部屋に戻れり 同

以前の歌より越してこられて半年余りのようだが、ホームへの入居であったのだろうか。慣れない町と環境へ。集団生活は気苦労が多いことだろう。食事後、自室に戻る前に隣室の人と言葉を交わす気遣いも。そつなく馴染んできておられる作者。時には前の歌のように、夕暮れ時、部屋に一人きりになると孤独と疲れが押し寄せてくることもあるのだろう。

カトリックとプロテスタントが共に住み宗教論争特に起こらず 立石節子☆

「抗議するもの」の意のプロテスタントとは、宗教改革を発端としてカトリック教会から分離し広義の福音主義を理念とするキリスト教諸教派だという。対極にある教徒が同居している模様。世界で

は宗教の違いによって戦争が起るほどだが、平和に共存しているという。何かほっとさせられる。

もう咲かぬと諦めたるシクラメン四月になりて花三つ開きぬ 井出裕子 チューリップやサニーレタスなども楽しみに育ておられるようだ。筆者もシクラメンが全く花を付けなかった経験がある。寒さにも弱くて冬にクタクタになって倒れてしまったことも。諦めていたのが花をつけてくれた驚きと喜び。

迫り来る「後期高齢者」という歳に若草色のセーターで抗う 金子八重子☆ 若草色には若見え効果があることに以前に筆者も気づいた。意気込みが大切なのだ。若々しく装い明るく前向きに生きていこうとする作者を応援する。

紋白蝶春一番の畑に來て菜花の蕾の開花急かせる 越澤太郎☆

柔らかな緑の葉と茎と黄色の蕾が愛らしい菜花は、春の気分を盛り上げてくれる。まとわる紋白蝶もうれしそうだ。冒頭から春の喜びの波動がリズムよく刻ま

れ、読者も心が弾んでくる。

首あたりに微かに匂ふ硫黄の香蔵王温泉 長谷川 剛

開湯一九〇〇年という蔵王温泉。強酸性の硫黄泉で肌と血管を若返らせる効果があるそうだ。日帰り入浴の帰りであろうか。体が温まり血管の脈打つ首のあたりに湯の香が匂うと。ああいい湯だったという満足感が伝わってくる。

筆まめな亡父の手帳の最後には掠れる文字で「今日医者に行く」 同

手帳に記された最後の言葉という。お加減が良くなかったのか文字が掠れていたと。病院に行きそのまま入院し亡くなられたのだろうか。傷ましいことだ。家族には思い出す度お辛いことだろう。

雪囲い外してみれば路の臺の芽吹きはじまる陽を吸い込みて 長澤千恵子☆

新潟県南魚沼郡もそうだが、雪深い地では家が雪の重みで潰れないよう雪囲いをする。春になり雪囲いを外すと日が差し込んで家の中が明るくなる。飲む自身を日を浴び芽吹く路の臺に投影して。

作品二

小林 芳枝 東京

青梅駅十時集合にて乗換へは三度あり七時半に家を出る
京成線浅草線総武線中央線に乗りて着きたり青梅の駅に
青梅駅の駅舎の外の木のベンチ友を待ちゐし彼のときの儘
愛知県より今年も車で来たといふ若き夫婦の着きてはなやぐ
朝毎に唱ふる般若心経を今日はなぞりぬ文字ひとつつ
写経用紙送り呉れたる住職を十七年過ぎてまた思ひだす
般若心経一文字一文字書き写す二百六十二文字残さず
願ひ事の欄は今年も書き入れず最後に低く我が名を記す
朝の雨止みて日のさす境内を朗らかに鶯のこゑ透りゆく
児 玉 孝 子 ☆ 愛知
五月はじめ季節戻りか寒寒と雨の降りきて暖房入れる
夏野菜多忙と言いつつ植える日を決めてくれたり五月十一日
トマト茄子胡瓜ピーマンにマルチ張りあんどん囲いにやつと植えたり
救急車近くに止まり出で見れば義妹の家なり驚きゆきぬ
連絡をしても次男に通じない吾に付き添えと隊員の言う
待つという心の大事「スカシユリ」膨らむ蒼朝ごと眺む

玉葱を採りたる畝に三十本芋蔓植える雨模様の日
庭草を抜きて右足挫けたり治ったばかりでまた傷めたり
卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

日替りで十度の気温が上下する今日着る服に毎朝迷う
五月になり寒い日が続き東北の今年の米の出来を案じる
庭の梅息子にたのみ収穫し吾は塩漬け夫は甘味噌漬け作る
梅漬けの塩と重し三十キロ二日目に水上がりほっとひと息
庭の梅を挽ぎて友の家を持ちて行く梅ジュースを作ると聞きて

川 上 美智子 ☆ 高知

棕鳥の雛の鳴く声絶え間なし昼の静かな住宅街に
棕鳥の声する空き屋の戸袋は糞に塗れて痛々しくあり
雨戸閉じ庭草茂るをその儘に放置されたる空き家の多し
声掠れ咳に苦しむ日の続き二時間待つ耳鼻咽喉科に
大抵は直ぐに治ると思いが若くは無いぞと病が教える
「長生きも大変ながよ」九十五歳のおみな言葉が脳裏に浮かぶ

小林 貞子 山形

暮れ方の床の間占めて大壺は肩の辺りに釉薬の影
翳りくる山の斑の雪蒼し尾根の彼方は赤き眉月
白茄子の苗を植ゑゐて夏思ふ焼いた輪切りに山椒の旨煮
北あかり大き種芋贖へり二つに割りて焼灰を塗る

北あかり伏せ置く薯の両端に茎と根伸びて片方を外す
「明日行くよ買物あれば」 いえ吾子よ溜まりある筈のタッパーでよい
取り寄せと手作り並ぶ昼の膳初夏の越後の姉妹の集ひ
長の姉正座清しく言葉述べ御祖に謝して笑顔の円居

植 松 千恵子 静岡

遠方より夫の友人泊りに来るこれをチャンスにと家磨きあぐ
よく咲いて楽しんだ鉢植ゑ地に下ろす少し葉が出て来年を待つ
集会所にツバメは巣作りもうしないのかヒナに会ひたし
春の蛇紐が動いたかと思えて悲鳴をよそに草むらの中へ
山桜まだ咲いてゐた山の奥喧噪離れて孤高の姿

今の子に戦争語れば言ふだらうドローンがあれば特攻なかりし
徴兵で皆戦争に行かされた僕は嫌だよ簡単に言ふが

山 本 述 子 神奈川

寒暖の差の大きさに耐へられず十日ばかりを床に伏し居り
回復を喜び呉る仲間たちと今日は楽しむグランドゴルフ
滝のやうに垂るる山藤気高くも森の緑に映ゆる藤色
森の中一際高き鶯の声に合はせて軽やかに行く
紫陽花のぽんぽん咲きたる雨のなか白色紅色青色紫
隣人の施設に入所したる後庭の紫陽花見頃となりぬ
有難や八十余年一日も米食べぬ日の無くて過ぎたり

大 野 茜 神奈川

もみぢ狩りの青蓮院の庭園に夕陽ひと時照りて暮れ行く
板敷きを畳に替へたる南の部屋冷たき朝も素足を楽しむ
飼へぬので猫の写真のカレンダー三つ並べて較べる歳末
みなどみらい高層ビルの町は元クレーン並ぶ大造船所
自己流のパソコン操作の学び直し指南書を買ひ一ページつつ
夕陽受けニシギの葉はくれなゐに秋は終はりと急ぎ燃ゆるか
慶大の日吉の森のイチヤウ並木黄なる上の空は青色

病院にて

安 川 敏 子☆ 埼玉

外に出て左見て前見た瞬間に道路に頭から転びたり
額より血が滴りて這いずってケイタイ取って119押す
救急車に今年二度も助けらる転倒気絶と転倒出血骨折
先生は風の如くに来て去って何を言ったか聞こえぬ私
窓の外のいつものビルに日の暮れて病院見下ろすカラスの集団
CTもMRIも異常なく骨折以外は治療もあらず

加 藤 富 子☆ 栃木

温室に幼の声もひそやかにただひたすらに苺摘む朝
欲が出て赤き苺を摘みており暑さを忘れて時を忘れて
自転車を降りて芥を拾う女性居り清々しき大人の仕草
鉢植ゑの薔薇がうなだれ叫んでる早く水をとっと水をと

ジャイアンツの長嶋選手亡くなりて彼の地の夫に報告をする
映像の長嶋選手のプレー見て忘れしあれこれ思い浮かびぬ

松 居 光 子 三重

物干しに布団カバーを広げる時夏の終はりの陽の輝けり
奮発して買ひたる料紙の寸法を違へぬやうに心して裁つ
出来映えは今一と思ふ書作品に締切り迫りて雅印押したり
郵便を投函せむとコンビニへ行けばポストは撤去されをり
最近まで人の出入りのありぬしがいつの間にやらコンビニ閉ぢをり
ガラス窓より覗けば中は空っぽでテナント募集の貼り紙のあり

谷 田 律 子☆ 栃木

藪椿黄色くなった葉を落とし新芽が静かに伸びはじめたり
ヒヨドリが戸袋の中に巣を作り開け閉め出来ずときどき覗く
川越の小江戸の街を孫達と時の鐘見上げながら懐かし
カーテンを開けて桜の下を見る今朝も待ってるスズメ達来て
朝の五時八十代われの戦闘開始草取りスズメの餌やり畑の仕事
散歩中遠くの家に見つけ近づけばバラ屋敷なり
今年こそツバメが我が家にやって来た心待ちしたうれしい初夏なり

藤 田 英 輔☆ 高知

趣味ということにあらずも会期中レトロバイク展スタッフとなる
陽をまとい黒光りして此処に居る亡父持ちいし小型のバイク

梅雨に入り甘とう穫りは始まりて手に包みもぐ初物の重み
若き日に酒酌み交わししことありき後輩の死を新聞に見る
中耳炎扁桃炎で発熱す抱きあげし児の力無き熱さ

小 嶋 知 葉☆ 茨城

水無月は母の忌なりて今年また紫陽花が咲く色とりどりに
母逝きて早二十年わが齡あの日之母に近づきており
故郷の父母眠る墓に佇めば少しの風に塔婆が揺れる
在りし日の母の姿彷彿と戒名に見る「従順」の文字
コーラスは公民館にて週一度突然若き入会者あり
思いがけず六十代の入会者笑顔あふれて熱く迎える
となり家は空き家となりて二年過ぎ庭のそちこちドクダミの群れ

水 澤 タカ子 山形

卒寿を期に紅花を蒔きて育てたり紅餅つくりを試し楽しむ
花穂出で遠目に見ても鮮やかに黄色目立ちて朱色に変はる
観終へたる未摘花を摘み洗ふ小さき虫をも流し出しつつ

洗ひ流しし花びらは布の袋にて熟成を待ち紅餅にせん
晴れたる日に干してはしまひ幾日もかけて干し上ぐ乾ききるまで
天童市小学五年生も学びをり紅花育てる総合学習

河北町の紅花資料館に寄りて見れば振袖に能衣裳の紅染め圧巻
この年も紅花育てんと畑地決め種を貰ひて蒔く日取り決む

裾野より新緑萌えて頂は山火事の峰茶色に広がる
松の枝ドウダンツツジ梅の木も擦れつつ隣家との付き合ひ良好
二人ゐて笑ひの絶えぬ夫と吾十年先もと理想を抱く
声にせず心で歌ふ曲のあり今日は終日「みちのくひとりたび」
病の後に百キロ運転したる夫「まだやれるぞ」と拳を握る
久しぶりに星空眺むる老二人言葉交はさず葉の音を聞く
病院の面会規制続きみて目の前の母の手握りてやれず

天に向かひ開く石楠花さはやかに二階より見ゆる紅色豊か
コンドルの子育て勇ましパタゴニアの高山の崖に見ゆる映像
夕日浴び光るツツジと薔薇の庭紅色鮮やか華やき添ふる
壁谷さんに誘はれて行く四人会シベールの珈琲結構な味ぞ
八十八歳の新聞さんの移転には間に合へずに寂しさぞ湧く
瑞々しきアスパラ二本と苺摘む私の今朝の一品として

八十代最後の春を如何にせむ庭に咲く花数ふる日向
八十代最後の春の豊けしを父も母も知らずに逝きぬ
八十代最後の春の母の日に「シャガ」惜しみなく妣に供へたり
八十代最後の春を惜しみつつ夫と踊りぬ「最上川慕情」

八十代の夫は偶に間違へる自分の振付けたる最上川慕情の踊り
八十代過ぎたりといへど元指導主事の夫の振付け天下一品
八十代最後の春の書道展に「枕草子」選び仕上ぐる
八十代最後の春の書道展「委嘱」に応へ心鎮めむ

鉢植ゑの黄色のパンジー咲き出して月夜に見ればメルヘンチック
夏椿母と見上げた遠き日の大きな木陰それだけが残る
三月の山林火災の傷跡が版画のやうに残る赤茶色
朝早く親戚の船見送れば出船の港に人等集まる
十九トンのイカ釣り漁船津軽海峡抜けて日本海へ出漁す
煌めく水平線をたまに見る若い父が居た夏の港で

日野正平「綺麗なもんやなあ」と富士山をしみじみ眺む在りし日の放送に
コロナウイルスに壊れたる細胞再生せよとホットミルクに蜂蜜注ぐ
キャップ一杯湯舟に入れる薬湯の深き緑にからだ沈める
店先にジャムパンあんぱんクリームパン駄菓子屋ばあちゃんの顔に目覚める
孫が来る娘も来るとライン着くも腰が上がるぬ「なんでも鑑定団」に
病癒えて田植ゑする夫生き生きと四条植ゑの田植ゑ機の上
早苗田に風吹きくれば映る雲静かに揺れて水音のする
茄子苗を植ゑて手袋外すとき指すり抜ける五月の風が

作品三

ひばり讃歌

新井光雄☆ 東京

子供の頃ひばりを唄えば明治の母「不良になります」「下品ですよ」と

わが友はひばり唄えば父親が教師のゆえかビンタを食らう

高校で部活の後でわが友がひばり唄って教師のゲンコツ

ひばりへの偏見消えたは大学の寮の飲み会高歌放吟

記者となりカラオケ始まり持ち歌を「みだれ髪」とす銀座に覚え

作曲の船村徹が同郷で兄の旧制中学同級

「みだれ髪」に万葉集が詠み込まれ「春は二重に巻いた帯」とか

ひばりの歌我の好むは「佐渡情話」マリア・カラスもこうは唄えぬ

「みだれ髪」をギターを弾いて語る時亡き母まだ言う「下品ですよ」と

立石節子☆ 東京

諦めず粘るも苦し さりとて引くに引かれず立ち往生す

友を見舞いコロナ禍のなか会えざりし夕暮れにわれひとり言のみ

梅雨雲に心蔽われ庭眺む蟻の行列何処へと行く

友ひとり佐世保から来て東京の我が家に寄りぬ卒寿祝いに

この夏は土佐へ行きたし室戸岬足摺岬太平洋へ

骨折の友を祈りて梅雨続く退院の報うれしく聞きて

井出裕子 静岡

隣保班長のわれ役を得て参加する年に一度の区民体育祭

幼児競走に区民らの歓声集まりて会場の雰囲気優しさに満つ

我もまたシニア種目に出場し顔知る人らと競技楽しむ

わが負ふは用具係なりリーダーから与へられたる襁褓す役

責任者は小声で嘆きぬ年々に区民の参加少なくなりぬと

半日の区民の集ふ行事終へ程よき疲れに午睡に落ちぬ

首藤文江☆ 埼玉

六階はポップコーンの匂いして静まり返る映画館の前

今日もまた予定通りに過ごせたと食器を洗う手元が弾む

風そよぎバラ咲き乱れ鶯の鳴く声響く生田緑地は

札幌でやつと見られたライラック薄紫がほのかに香る

もう一度行ってみたいと写真見て思い出してる札幌の街

高藤朱美☆ 茨城

子供の日早朝に見るスカイツリー孫の結婚式までの車窓を楽しむ

宴に集う孫の友等に笑顔満つ未来を思い平和を願いぬ

シャンソンを披露されたる義父様のふたりの門出を祝う歌声

孫の友はテキサスより来て出席し夕食皆でと娘より聞く

二年目の歌とダンスを学ぶ女孫「楽しい」と瞳輝かせ笑む

六月号 十首選

冬雷集 益坂順子

「書譜」といふ法帖を見れば唐代の確かな草書が古典に秘めらる

兼目久

道隔て建ちたる家に住む人の三軒とも

青木初子

に若き人なり

朝露を確と受け止む今朝の庭漲る精気に深呼吸をす

ネタニヤフ何を祈るや神前に着弾先は病院・学校

山口嵩

さやさと音の迫りて雨脚のいま降りかかる窓さきの木に

天野克彦

断定の言葉をやすやす口にする顔を眺めつ反論はせず

高松美智子☆

無機質の塔にも人の営みはありて夜へと光を放つ

ブレイクあずさ☆

物かひて来たる息子に蛍の光うたひて渡す古き紙幣を

姉川素枝子

さくさくと和梨のやうな朝が欲し腕の痛みは朝四時にくる

井上蒼子

消極のうつつのさまのわが顔の鏡に映り事渉らず

井上楨子

六月号 十首選

六月集／残響集 山口嵩

繰出した左の上段順突の空を切裂く音の清しく

石渡静夫

ツアーには一人参加の人居りて共に巡りぬアラモアナセンター

川上美智子☆

砂浜は足指刺激に良しと知り転倒防止を期して歩めり

山本述子

生れてより休みなく動くわが肉体劣化はあれど今日は動ける

児玉孝子☆

山の火事ひと月経ちても鎮火せず悔れぬ火の凄まじさ知る

津田美知子

ふかふかと落葉積みたる山肌に火事の映像浮みて来たり

益坂順子

牡丹色の道行きコートはブラウスとベストになりて姉より届く

井上鈴子

痺れある素足に畳を歩く日は鳥取砂丘の砂踏むごとし

梶尾栄子

相統の田畑の耕作なさざればその処分などいかにかなさむ

岩村知康

園児らの名前覚えて呼びかける保護者の願い推しはかりつつ

片桐美穂子☆

山々の緑に圧倒されつつも緊張ありてトンネル抜ける
久々に山また山を越えて来て畑作に励む姉と再会す

羽田孝輝 山形

九月には芽吹く花芽に思ひ馳せ今まだ咲きゐる皐月を鉢む
遠来の友皐月展訪ね来て話は尽きず友を見送る

渾身の一樹を飾りてそれぞれに思ひを語る皐月の展示
外知らず中で育ちたる猫たちは外に放てどすぐ戻り来る

猫たちはカナヘビ・モグラ啗へ来てわれに見せては玩具となせり
皐月しか頭になくて母親の立ち日忘るる親不孝せり

古稀祝ふ同窓会を企画せり歓談だけで次第は決まる
終りたる花摘む先にクマンバチ早く吸へよと手を休め見る

気持ち良し美空ひばりを聴きながら軽トラ飛ばす快晴の朝
金子 八重子☆ 千葉

朝蜘蛛は縁起がよいと知りつつも恐怖に戦き退治に手間取る
肉そばを自信に満ちて勧めらるこれはたまらん汁まで飲み干す

白紫陽花今年も見るかこの道で固き蕾の膨らむを待つ
らつきょうを剥けば白肌現れてあやかりたきかなシミのある肌

きょうも又ついでる一日と確信す7のぞる目の車に出合う
早々と米は積まれて大臣の株は上がりて米価は下がりぬ

少々の味噌を入れて古古米の味が気になる新米以上に

歯磨きのしぶきの飛んだガラス窓指で擦って昨日を消したり

越澤太朗☆ 茨城

瓜三種畑に定植す梅雨に入り西瓜甜瓜ズッキーニなど

苗床に「ぼっちゃん南瓜」芽吹きおり堆肥多めに入れて実りを
我が畑を雉が横切る屋下がりコンビニ弁当の友も笑顔に

大根をグンと引き抜く白じろとかたちも良くて一級品なり
ちよつとこいちよつとこい コジケイ鳴き止まず畑の手を休めたり

落花生のマルチを剥がすタイミング花の盛りを見極めながら
後藤恭介☆ 茨城

咲き満ちて風に運ばるる花びらのわが弁当の上にも落ちる
稲敷のチューリップ公園を見に行かむ色とりどりの五列六列

春の屋釜めし屋での懇親会俳句の友と近況語る
図書館の学習室で読書する学生席にシニアも混じる

一途なる久女の一世を学び読む田辺聖子の『花衣ぬぐやまつわる…』
連休の出人を報じるテレビ見てシニアの旅は人出を避ける

連休後の那須高原の露天風呂若葉の木々と爽やかな風
黒磯の市立図書館駅前なり次世代育てる工夫のひとつ

永井享子☆ 東京

柿の芽がみるみる伸びて枝さきに花芽を多くつけ始めたり
早朝の鳥の囀り遅しく何も憂うなと我を励ます

六月号 十首選

作品一 石渡 静夫

尾根走る鳩止めんとヘリが撒く飛沫は
花の散る如くみゆ 田端五百子

白木蓮胸にかざりて出席す卒業式はは
るか遠き日 倉浪ゆみ

守り札受けに遠路通いたる友らの思い
ゆめ忘るるなかれ 飯嶋久子☆

渡良瀬遊水地の土手黄に染めて菜の花は
尽きることなく続きたり 本郷歌子☆

一人つ子の習性老いてそのままに安ら
ふ孤独さみしくあらず 戸部田とくえ

桜花はるかに消ゆる道を行く昭和を残
す運河に沿ひて 松本英夫

長男の近くの施設に入居せむこ横浜
を去り難けれど 三好規子

年増して何気なきことの値打ち知る
「行つてらっしゃい」「おかへり」など
の 佐藤靖子

前に行く人の歩きに合はせればすぐに
歩調のずれて後れつ 齋鹿ミヤコ

お母さん梅も桜も終はつたわ私これか
らどこに行かうか 中島千加子

六月号 十首選

作品二 大塚 亮子

部屋ぬちに鉢植色々咲きをれど今宵
は梅酒で桜に乾杯 東ミチ

雨続き桜は三分満開を寒々と待つ四月
になりて 川俣美治子☆

よい天気山や畑を通りゆく長女元気が
と思いながらに 早乙女イチ☆

庭いっぱいに花咲かせたる家ありて行き
も帰りもたのしみで見ると 卯嶋貴子☆

ごきぶりを育てて餌にすると初め
て聞きぬ蜥蜴の生態 加藤富子☆

花好きの伯母の供養に花籠を送りて心
に寂しさのころ 永野雅子☆

クリーニングに出さむと入れたる袋よ
り取り出して着る花冷えの日に 松居光子

山林火災で焼けたる漁村の家々を黒く
濡らして春の雨降る 松崎みき子

利根川の堤の桜見事なりあの日の若木
大樹となりて 小嶋知葉☆

「灯台のゆらめき そりゃあ嬉しかった
さ」嵐の夜を語りき父は 藤田夏見☆

今 福 崎 子 ☆ 東京

山並の小さく見えるは富士かなと明日より眺むる楽しみ増える
ゆったりと雉の番が空を舞う只嬉しくて暫し目で追う

川に寄り何時も来ますと看護師さんに聞きて飛び来る雉を待ちおり
窓の外に今日も来ぬかと雉を待つ木々の緑を眺めながらに
雉一羽飛びはねながら早歩きめずらしき眺め息つめて見る

長谷川 剛 山形

強風にネットに確としがみつくりの苗の細き巻きひげ
腹八分の人の血管は若いよとラーメン大盛食みて友言ふ

早苗田に白鷺三羽餌を突きみて田園の春長閑なり

吾妻山の山影映える水張田に春風そよぎさなみ立てり

畝を立てマルチシートに穴をあけ茄子苗植ゑる五月雨のころ
早朝に満天星つつじの花を食むひより見つめ追ふを忘るる

首を振り鍵盤たたく辻井信行の衝撃の音に涙腺緩む

かがり火と夕焼けの中の薪能東次郎舞ふ愛し「鬼瓦」

長 澤 千恵子 ☆ 山形

風そよぎ植えた田圃の緑増し陽ざしを吸いて日毎伸び行く

窓越しに西山を見る雨上り緑眩しく心爽やか

早朝に畑耕すこのとしも腰を屈めて土と向き合う

サロンでの日帰り旅は山形へ放送局をぞろぞろ歩く

六月号 十首選

作品三 天野 克彦

軒下の堅き雪塊投げやれば小さき池に
大波の立つ 奥山清子

中空に明かりのこりて街とほき東も西
もしづまりゆきぬ 佐々木政子

枝先に白き蕾の散歩道春の息吹きよハ
クモクレンは 高藤朱美 ☆

忘るるを恐れメモする手帳さえ捜しあ
ぐねて一休みとは 立石節子 ☆

咲く桜舞ひ散るさくら一面のピンクに
染むる香貫山をゆく 井出裕子

白鳥は編隊となり空高く白き帯なし消
えてゆきたり 羽田孝輝

迫り来る「後期高齢者」という歳に若
草色のセーターで抗う 金子八重子 ☆

雪の中より昨年の大根掘り起こす包丁
入らばパチンと割れむ 長谷川 剛

幼児は雪解けの庭を走りくる陽を受け
燥ぐ姿愛らしく 今野澄子

雪囲い外してみれば露の臺の芽吹きは
じまる陽を吸い込みて 長澤千恵子 ☆

昼飯は県庁十六階のカツカレー味は濃い目で水御代りす
眺め見るこの風景を一枚のエスキスとして心に刻む

今 野 澄 子 山形

春雨が地を潤せば花咲きて草も勢ひ手を煩はす

朝早く耕運機の音響き合ひ畑仕事は本番となる

軽トラに山菜乗せて走り来て友の呉れたる旬を味はふ

宝鐸草を増やし続けて楽しめば友の一言毒草なりと

友訪ね遺影の前で茶を飲めば尽きぬ思ひに涙と笑ひ

大好きなメロディー入りのオルゴール鳴らぬままでも側に置きたし

河原木 光 子 ☆ 広島

町の名のふくやまと付く銀の薔薇夫の丹精清く咲きたり

病院の献立にもあるふなやきはふるさと尾道の初夏の味わい

島を行くサイクリストを追い抜けり車窓に光る海のきらめき

朝採りのアスパラガスときくらんぼ二人暮らしの一皿となる

少年のお婆ちゃんの声掛けは孫なき身には馴染めぬものよ

二人居の暮らしは小さくなりてきぬゴミ袋は25リットルとなる

玄関へ石段のある不便さを若き日には思い及ばず

猿 渡 憲 子 ☆ 長崎

投稿を休みいる月も届きたる冬雷の文字に心のさわぐ

歩数計携帯しての外出を日課とすなり八十路の吾は

大崎瀬都歌集

『みづぐるま』

桜井美保子

著者の第四歌集で平成二十五年から
令和六年までの作品を収録。

加代ちゃんと呼ばれるときは加代ち
やんになりて応へぬ母との夕餉

加代ちゃんをアルバムのなかに見つ
けたり母の一番古い友だち

歌集のあとがきには十二年間、母は
重度の認知症だったと書かれている。

そうした母を詠んだ歌が多く、心を打
たれる。病む母の言葉に逆らわず、優
しく応える作者の姿がある。

「おおぬくい」わが手を握り母は言
ふ病室の夜の灯りの下に

魂の底の底にはきつとある母が忘れ
たわたしの名前

瞬く間に過ぎてしまふ母を見舞う時
間。その声や言葉、ぬくもりをしっか
りと大事に受け止める。母よ、魂の底
では娘であること、分かってくれてい
るんだよね。読者もそう思わずには、

枝先に米粒程の白き花ドウダンツツジ可憐に咲きたり
雨雨雨日が一昨日降りつづき見なれたる景色もぼんやりけぶる
疎開した我生きのびて原爆忌に八十路をすぎて健やかに居る

消えてゆく寒明け荒ぶ日の豪雪よ何だったのかあの闘いは
望み抱く想いは熱くこころにはウルマンの詩「青春」薫る
細波を夕陽が染める日本海喜寿の私の夏が過ぎゆく
白布峠越え眺むれば光る湖裏磐梯へ夏を旅ゆく
郷愁の椿念仏踊りの輪農の文化の繋ぐを願いて
山の端に紅葉の影かすみいて散居刈田の秋景寂し
戻ること叶わぬ眩しき頃の日日偲べば今宵も秋霖の降る
鮭の国城下町並み訪ねゆく往古を偲ぶ晩秋の旅

幼き日初めて聞きし鶯の声はテレビの猫八の芸嫁ぎ来て鶯の声聞きながら作る味噌汁蕨を入れて転任しふた月となる子を招き山菜料理でもてなす夕餉弟の無き家ひとり守り居る義妹に持ちゆく筍を掘る筍を持ちて訪ねるさとのあるわが幸せを夫に語りぬ
 筍筒にも下駄にもなれず桐の木は薄紫の花を立たせる
 大木にからまりてゆく藤蔓はてつぺんまでも花を咲かせる

いられない。

抑留の体験談を繰り返し酔ひ潰れゆく父にてありき

高く暗き空ある渋谷を歩きをり他界の父より電話はなきか

決断の早かりし父迷ふとき亡き父を呼ぶその声を聴く

父への心情が濃く出ている作品。他界した後も、父はどこからか娘を見守り支えてくれているのだろう。

シンバルはそつと合はせることもあり間奏曲のなかに聴きとる

小さなことを捉えた作品にも心の動きが瑞々しく表現されている。

渾身の力を込めて拍手せし二十年なり手のひらも老ゆ

沢田研二のコンサートに通った二十一年。作者に生きる力をくれた素晴らしきコンサートだったのだろう。

母のあない故郷の町道ばたの木にも花にも母が満ちてゐる

著者は「ヤママユ」同人で、高知県四万十市の出身。故郷の風景の中にある水車が歌集名となった。

(角川書店刊)

第64回冬雷大会用詠草

・（ここから切り取って投稿することもできます・キリトリセン）

*本年も特集「誌上冬雷大会」の企画はあり
ません。是非とも会場の方へお運びくださ
い。

ご住所

⌊

八月三日（日曜日）必着

（現在のご予定を○で囲んでください）

☆会員は全員出詠が義務づけられております
出詠費 一〇〇〇円（詠草制作・郵送費）をそえて、
下記へお送り下さい。

小林芳枝宛



編集 後記

▽大友柳太朗と石田波郷は同じ中学の級友同士で大友が波郷に俳句を勧めたことは、大山敏夫氏執筆の連載の第一回にあった。今回の論の終りに大友の歌集名『渚』は波郷の句からの影響ではないかとあるのが興味深かった。素朴な疑問だが大友は何故自分がやっている短歌ではなく、俳句を波郷に勧めたのだろうか。その人の才能を見抜く力があつたのだろうか。いろいろなことを考えつつ、この論考を楽しんでいる次第である。

▽「冬雷集評」と「月集残響集評」は評者が一名だが、そのほかの欄は評者が二名である。私も批評欄の一つを担当させていただいているが、これらの欄の充実には有難いことだ。歌を作る。批評を読む。あるいは批評を書く。一連全て勉強である。

(桜井美保子)

▽農作業がいよいよ佳境に入り誌面を多くの歌が飾る。清々しく希望溢れる農業の歌はまつすぐ心に響く。一昨年の七月には青々と健康やかに稲の育つ水田を眺めていたが、八月末には稲が枯れ地割れした田に変貌し驚愕した。猛暑と早魃に。そして米不足と米価高騰に至る。これ程科学技術が進歩しても農業は天候と災害に翻弄される。「グスコブドリの伝記」ではないが何とかできないものか。

▽冬雷大会用詠草用紙が誌に綴込みされると大会の実感が湧く。再会が近いと。▽また一つ歌壇の有力結社誌の休刊が急遽決まった。なお本年一杯をもって終刊を宣言している古い結社誌もある。企業などでも、倒産ではなく廃業とするのはなかなか難しい手続きがあると聞く。小誌などに於いても、仮にその時になれば突然の告示ではなく、手厚く準備して整理する方向で考えることになるうが、幸にまだそういう

う状況ではない。新入会の方も少なくないので、希望の持てる方向で動きたい。

(大山敏夫)

▽梅雨に入るとしとしと雨が降るのかという予想は甘かった。いくなり真夏を思わせる暑さに見舞われて北国の北海道も気温三十度を超える日が続いている。今日は台風2号が関東地方に近づきながら熱帯低気圧に変わって急に雨が降ったり日が差したりして、息苦しくなるくらい蒸し暑い。

▽月々の歌はメールでも送ることが出来るが手書きの方には二〇〇字詰め原稿用紙を使用している。原稿用紙サイズが揃わないと校正や選歌後の整理のときに差し障りができるので規定の用紙を使用して欲しい。希望者は冬雷専用の原稿用紙三冊千円(送料込み)でお送りしています。

▽御寄附御礼申します。

西村邦子 井上鈴子

▽新入会員紹介

児珠純子氏(紹介 井上蒼子氏)
(小林芳枝)

お詫びして訂正します。

七月号18ページ下段、高橋輝次氏が、大友柳太郎歌集『渚』を二冊所有するとありますが、これは筆者の読み間違いで、事実は「一冊所有」が正しく誤解を招きご迷惑お掛けしました事、ここにお詫びして訂正させていただきます。
(編集室)

《冬雷規定・掲載用》

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

*会費は原則として振替にて納入する事。

A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円

一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
・担当 大山 敏夫
・担当 桜井美保子
作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
・担当 小林 芳枝
・担当 小林 芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山 敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林 芳枝 kysite@nifty.com
桜井美保子 mihoko496@sf.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2025 年 8 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円